

りしんねんだいき

離神年代記

第七話

包 囲 網

秋本カイ

画戸谷展洋

砂 漠

ザッザッ ザッザッ
土を掘る音。

また、あの夢に引き込まれて行く。塚田瑛佑は、絶望的な気持ちを感じながら、成す術を知らない。井戸に落ちていく人のように、落ちて行くのを止める術がない。

号令がかかり、全員の手がびたりと止まる。スコップを土の上に置く。辺りには老若男女が立ち尽くしている。女も子どもも、銃筒に小突かれて前に出る。地面にぽっかりと口を開いた穴。その淵に立たせられる。見張りの兵士たちが数歩下がる。銃口が向けられる。一斉射撃。

硝煙の臭い。白い煙。瑛佑の隣りには、体格の良い男がいた。狙撃の瞬間、男の手は、瑛佑の頭を押さえつけた。手は開いたカタチのまんま吹き飛んだ。瑛佑の前に小柄な女が飛び出した。盾になる。女の眼球が吹き飛ぶ。瑛佑は噴出した脳髓ごと女の頭を抱きとめようとした。体が宙を泳ぐ。それを止めて足に何が絡みついた。小さな手だ。まだ、人生の何物をも掴んでいない幼い手。その手が必死に、瑛佑の足を掴んで、彼を引き倒した。耳もとをキーンと弾丸が掠める。瑛佑は、撃たれた多くの人々といっしょに、穴に落ちた。今、自分たちの掘った大きな闇へと落ちていった。

憤りに息が止まりそうだ。体の痛みなど感じない。心が血飛

沫をあげる。

(僕を殺せ！ 僕だけを殺せ！ 殺したいなら、僕だけを殺せ！ ぼくだけを……)

そこにいけば、どんなゆめもかなうというよ
だれもみないきたがるが、はるかなせかい

団地の西日の当たる窓辺で、お下げ髪の少女が歌っていた。幼い瑛佑の最初の記憶。歌う少女の視線は、ぼんやりと窓の外。歌いながら、夢見るようになたへ泳ぐ。でも、彼女は、はるかなせかいを夢見ているのではない。ただ、呆然と、太陽の沈む様を追っている。

少女は、瑛佑の姉である。彼女と三人の弟を置いて、親たちは出て行った。代わりに彼女が、弟たちの面倒みていた。

一度、父親が帰って来たことがあった。母親が顔を見せたこともあった。姉は、ここにいればいつか両親が戻って来ると信じていたのだろうか。

瑛佑の記憶の中で、姉はいつも微笑んでいた。不安になって振り返る瑛佑に、ゆるやかな笑みを浮かべて応える。

瑛佑は、小学六年生になった時、姉と同じバイトをした。

朝暗い内、牛乳瓶が団地の階段下に配達される。それを、エレベーターのないこの団地の二階から五階の部屋の玄関に届けるのである。狭い階段を上って、左右の玄関に牛乳瓶を置く。

また上って、階段を折り返し、上って、次の階の玄関脇に牛乳を置く。四回繰り返して、下へ降りる。次の階段に移って繰り返す。一つの建物が終わると隣の建物へ。一つの棟が終わると隣の棟へ。上って降りてを繰り返す。牛乳瓶は重さを増す。両手のまめは何度も潰れて、固くなった。

牛乳を配達する玄関の内から、声が聞こえる。母親に起こされた子どもたち。

「さっさとご飯を食べなさい」と急かされている。

最後の配達先の家の朝食が始まってしまふ。急がないと怒られる。重い牛乳瓶の入った袋を持ち直し、肩で息を整える。

配達を終えると、学校へ向かう子どもたちとすれ違いながら、部屋に帰る。ランドセルを背負って、学校に向かう。足は、棒のようにのろのろとしか動かない。また、遅刻だ。

六年生の頃の姉は、瑛佑よりずっと小柄だった。このバイト代で弟たちにパンの耳を買って食べさせていた。

そして、ある日、姉は交通事故で死んだ。父親が帰って来た。母親が帰って来た。少しの間、両親と三人の弟たち、親子五人の家族に戻った。

当時、商店街や町工場のラジオ、いろいろなところで、姉の歌っていた歌を耳にした。流行っていた。家に、テレビはなかったけれど、一度だけ電気屋で、それが主題歌である番組を見た。主人公たちは、砂漠を旅していた。

瑛佑は、大人になって、白居葉子と出会った。

彼女は、瑛佑の話を聞いてこう言った。

「やさしいお姉さんだったのね」

「姉が小学生だったなんて……あの頃は大人に見えました。何を言ってもいい、おとなに」

「何を言ってもいい？」

「ぼくたちがいるんことを言うたびに、とても困ってたんでしようね」

「いろんなこと？」

「たとえば、アイスクリームが食べたいとか、テレビを見たいとか」

「そう」

「それから、今はもつといろんなことがわかります」

「なに？」

「姉が死んで、交通事故のお金が入ってきたから、父も母も帰って来たんです。そして、それを使い果たしてまたいなくなっってしまった」

「……」

「上の兄は病気で死に、下の兄は、行方不明です。両親のことを、家族と思いたくありません。僕に、家族はいない」

「お姉さんは、死んでしまっても、大事な家族でしょ」

葉子は、微笑んだ。

（姉さんと同じ微笑みだ）と、瑛佑は思った。

「この間、カーラジオで、何年ぶりかで、姉の歌っていた歌を聞きました。歌詞……初めて、そうかそういう歌なんだ、つて思いました」

「何の歌？」

瑛佑は歌った。

そこにいけば、どんなゆめもかなうというよ
だれもみないきたがるが、はるかなせかい

瑛佑の声は細く淡々と流れる。不思議な響き。聞く者は、彼に尋ねずにはいられない。

「どんな夢？」

瑛佑は答えない。

「お姉さんの夢は何だったのかしら？」

「葉子さんの夢は何ですか？」

葉子は、思いがけない顔で、瑛佑を見た。

「なぜ？」

「僕は、葉子さんに何かしてあげたい」

もう一度、姉と同じ微笑みをみせる。

「ありがとう。でも、私は、欲張りだから大変よ」

「だいじょうぶ」

「では、銀の舟を」

瑛佑は、目覚めた。

勢い良くベッドから体を起こす。身支度を整える。無駄のない動き。今、やらねばならないことがある。悪夢を引き摺っている暇はない。

いつものように五分で部屋を出た。まだ暗い朝。

遠い地で、瑛佑の上に折り重なって死んでいった人々。瑛佑を庇って、銃の前に身をさらした。

瑛佑は、このいつも見る悪夢を、彼らを忘れないために刻まれた刻印だと思っている。

休場は、雪那が入院したとの連絡で海老沢病院を訪れた。

「思ったより元気そうで、良かった」

「ありがとう」

正直な話、雪那が元気かどうかはわからなかった。彼女には皮膚らしい皮膚がないので、顔色というものがない。動きの緩慢さもいつものことだ。ただ、呼吸の荒さが体調の悪さを示しているのかもしれない。

「なんで入院なんだか。隣りに居たって、ここに居たって、大した差はないのに」

「じゃあ、ここにいた方がいいじゃないですか。海老沢先生の目が届く分、少しは安心だ」

「今私が、生きてここにこうしていられるのは、伽耶子さんのお陰。彼女は、私が部屋で倒れた途端に、海老沢先生に連絡を

入れてくれたの。もう、彼女には、なんでも見えるんだわ。だから、入院なんて大袈裟なことしなくても同じ事なのに」

「そういう伽耶子さんがついていてくれるのは心強いです。白居家の回りは、ぶつそうな連中がうろついてますからね」

「私の弟は、政治家ですから、あんまり政府の人間の事を悪く言わないで」

「すみません。まあ、あいづらからしたら、こっちの方がやばい人間なのかもしれないけど。でも、なんなんですかね？」

休場の『なんなんですかね』は、意味不明である。が、彼特有のニュアンスは伝わってくる。

「確かに、瑛佑君は、だいぶ動きにくくなってると思うわ」
塚田瑛佑との連絡は、もっぱら雪那の役目になっていた。公安は完全に、この地域、サクヤグループ関係者に目を付けている。

「でもまあ、大丈夫、あいつならどうにかするでしょう」
「彼は強いから」

雪那の信頼はゆるぎない。四年前、ぼろきれのようになって、この日本に帰ってきてから、再び立ち直るまでの様を見ている。

明彦と二つ違いの葉子の愛弟子。何の血の繋がりもない瑛佑の方がむしろ葉子に似ている気がする。人を導く力を持っている。

帰りに休場は、病院の廊下で小走りの看護師とぶつかりそうになった。

「すみません」

彼女は、頭を下げ、急いで走り去る。

「見つからないの？」

廊下の遠くで、話す声が聞こえる。

「はい」

「しょうがないわね。でも、まあ、ホームレスじゃ、お金も持つてないでしょう。逃げ出してきて良かつたんじゃない？」

「そんな……」

（さっき聞えた救急車のサイレン……運び込まれた病人のこただろうか？ 浮浪者の患者が、看護師の目を盗んで逃げ出したということか？）

休場は、病院の駐車場まで歩いた所で、話題の浮浪者を見かけた。亀のようにのろりと歩いている。薔薇の花を持っていた男だ。

「やあ、看護師さんが探してたのは、あんたかい？」
休場は声をかけた。

「ほっといてくれ」

男は、フラフラと歩き続ける。

「どこが悪いんだ？」

「末期がん、もう助からない、だから、気にしないでくれ」

「そうはいかないだろう？」

「そうはいかない？ 何が？」

「見て見ぬふりは出来ない」

「なんで？」

「なんであつて」

「あんたの良心のために、俺が病院に入れられるなんて馬鹿らしいだろう」

男の歩みは、よろよろしている。休場は、腕を擱んだ。男は、振りほどいた。目が合う。望遠レンズを通してように、遠くに休場を見ている気がした。休場は、それ以上、追わなかつた。追う理由が見つからなかつた。

男は公園に戻つた。彼の終の住処と定めた場所である。静かに身を横たえる。痛みは、もうどうしようもない。一人で死にたかつた。なぜかわからない。そう思い込んでしまつた。

男は、戦場を撮るカメラマンだつた。砂漠で、国連の医師団の活動を取材した。彼らは、テントの下で患者を見る。何十人何百人という患者たち。男は、いい写真を撮っている気でいた。

ある日、十キロと離れていない村が、政府軍の襲撃にあつているとの連絡が入つた。怪我人が運び込まれて来るのを待つた。太陽が真っ赤になつて地平線に墜ちて行つた。一人もやつてこなかつた。女も子どもも全員射殺されたと聞いた。翌朝、その村へ行つた。写真を撮つた。

日本に帰つてからは、普通にカメラマンとして暮そうと思つた。どうして、自分がこんなになつてしまつたのかかわからない。まるで、現実がぶよぶよとした皮を被つてしまつたよ

うだつた。あれから、四年経つ。四年も経つたのか、四年しか経っていないのか。家族のもとに戻ろうとしたのに、うまくいかなかつた。心が無くなつてしまつたのかもしれない。

写真を撮りながら、放浪していたが、そのうち写真も撮らなくなつた。金がなくなり、病気になる、どこに浮浪者という線があつて、いつそれを踏み越えたのか？ あのととき、異国の地で耳にした歌が聞こえてきて、この公園に住みついた。

砂漠で聞いた歌。凍てつく夜の真闇の中、車陰に身を細くした灼熱の昼、砂嵐のはるか彼方、繰り返し耳にした。

そこにいけば、どんなゆめもかなうというよ
だれもみないきたがるが、はるかなせかい

祖国の小さな公園で、男は死んだ。

コウタは、公園で死んでいる男を見つけた。知つた顔だつた。日本人なのに、なぜかコウタの国の言葉を話せた。夜、この公園でいっしよに酒を飲みながら、砂漠で見える星の話、不思議な生き物の話をした。男は病氣だつた。コウタが医者に行こう、と言うと、もう助からないのだから公園にいさせてくれ、と答えた。死んだら、土に埋めて、土に返して欲しいと頼まれた。

コウタは死んだ男を伽耶子の住む森に運んだ。彼らの救世主である瑛佑も、昔住んだ森である。このへんで、人を埋めるこ

との出来るほど土のある場所は、ここしか思いつかなかった。タズさんにスコップを借りて、土を掘った。砂漠にはない湿った臭いのする土だった。

夜中何時間もかけて作業を終えた。ここに男が埋まっているという目印をたてようと辺りを見回したが、男はそんなことを望まない気がしてやめた。

コウタは、難民キャンプで育った。祖父母はぶどう園を営んでいた。父母も子どもの頃には、そこで遊んだという。コウタは難民キャンプで生まれ育ち、ぶどう園などまったく知らない。頭は良かった。でも、親友のハサンはもつと頭が良かった。対立と抗争を平和へ導くためには、子どもへの教育が必要である。それが、大国の言い分。キャンプから遠く離れたその大国の学校へ、一握りの子どもたちが送り返された。ハサンは、その中に選ばれるほど賢かった。

帰って来たハサンは、コウタたちに、憎い相手に石を投げつけることは何の解決にもならないと言った。現に彼は、コウタたちが兵士に石を投げつけても、それに加わらなかった。コウタたちは逃げたが、石を投げていないハサンは逃げなかった。

そして、彼は撃ち殺された。最後、兵士がハサンに銃を向けたとき、物陰に逃げ込んでいたコウタたちに、何を言おうとしたのか。口を開きかけた。言葉が出る前に、何十発もの銃弾がハサンの体を通り抜けた。見せしめにされたのだ。

（あいつらには、俺たちの区別がつかない。奴らにとつて俺たちは、顔のないうじ虫だ。人が足下の蟻の区別をつけないように、あいつらには俺たちが違う人間だつてことを理解する気がない）

コウタは、二人の仲間とキャンプを抜け出した。歌にある神の国ナサートを目指した。盗んだありつた金の金をかき集め、運転手に渡した。空になった給水タンク。そのゆるやかなカーブの底に身を潜めた。検問で見つかれば、全員が殺される。息をひそめてじっと耐えた。まるで自分を映す鏡を見るように、弱っていく仲間を見つめ合った。何度も検問があつた。トラックの壁面は、焼け付いていた。それでも、助けを求めたら撃ち殺される。死んでも声を発する事は許されない。意識が遠のいた。

国境を越えると、運転手は三個の死体を引つ張り出して、道端に捨てる。今まで何度もそうしてきた。何のためらいもない動作だった。でも、死体は、二つ。コウタは生きていた。トラックが行ってしまうまで、息を殺し、用心に用心を重ねて待った。そして、起き上がった。その後何日、何も口に入れなかったことだろう。それでも生き延びた。

コウタの名は、瑛佑にもらつた。救世主エースケは、病気で死んだ自分の兄の名を付けてくれた。コウタという名、それが彼の誇りだった。だから、祖国を捨てる決心をした。神の国でもう一度生き直すのだ、仲間たちの分まで。一声も発すること

なく、炎熱のタンクで死んでいった友の分まで。

コウタは、生きて、生きて、生き抜いて、ナサートにたどり着いた。彼らの求めてやまなかった神の国ナサート。

砂漠に見捨ててきた仲間を思いながら、男を弔った。最後に、男の好きだった歌をうたった。

『そこに行けば どんな夢も叶うというよ

だれもみな行きたがるがはるかな世界

その故郷の名は ナサート どこかにあるユートピア

どうしたら行けるのだろう 教えて欲しい

ナサート ナサート they say it's in TOKIO

ナサート ナサート 神の国 ナサート』

それは、コウタたちがずっと心の支えにしてきた歌だ。歌い終えると、湿った土に口づけた。

今、コウタは、歌の中の国、ナサートにいる、救世主エースケと共に。

解 任

(こんな馬鹿馬鹿しい話！)

多枝は、この小説仕立てのような状況に、腹が立って仕方なかった。部屋の外から鍵はかからない。

(ピアノ？ 大理石の置物？ 一体、何を置いたんだか！)
とにかく、ドアは押ししてもピクリとも動かなかった。

今朝、母から、

「おとうさんが、倒れたからすぐに帰って来て」と連絡を受けた。

「どこの病院？ 直接行くわ」

と言う多枝の返事に、母は、

「とにかく、一度うちに帰って来て」

の一点張りだった。

なんか変だとは思っても、まさか、こういうこととは思わない。うちに帰ったら、部屋に閉じ込められた。

携帯で、秘書室の様子は逐一聞いた。今日がそのクーデターの日というわけだ。笹原社長解任の狼煙が上がって、社は蜂の巣を突いたような騒ぎになっているらしい。これ以上の長電話は出来そうもない。(とにかく、あとで)と、携帯を切った。

吃驚仰天とまでは言わない。

(だから、戸田さんのことはだめだって言ったのに！)

多枝には、笹原社長が、なぜ戸田をあんなに重用するのかからなかった。口が酸っぱくなるほど、

「彼は、だめです」

と繰り返した。

戸田は、危険だった。バックが強すぎる。まるで、笹原を快く思わないものの集合体だ。戸田自体が悪い人物だというのはない。けれど、彼のバックについた人間たち、いや各企業体がどう利益を誘導したがつているかを考えるなら、無防備過ぎ

る。戸田は多くの政治家、企業に近付き過ぎている。彼は周到に、笹原との距離をおいて行動しているのに、笹原は子飼いの戸田を信用し過ぎていた。あまりに多くの権限を与え、手の内をさらし過ぎていた。

だから、多枝は、ずっと心配だった。笹原が無防備な分、多枝自身の手で戸田の弱点を調べ上げた。備えておくべきだと思つた。ここでそれを持ち出すことは、サクヤグループにとつては不利益になる。けれど、笹原が失脚することに比べたら何ほどのことだろう。

窓から外を見た。すぐ目の前に、木の枝がある。

(ありえないほど、ドラマチックだわ)

多枝は、そつと窓を開けた。

(ここから美少女が抜け出すなら、絵にもなるけど、こんなおばさんじゃね)

二階とはいえ、結構高く思えた。

「多枝、馬鹿な真似はやめろよな」

下に、兄が立っていた。

「見張つてたの？」

「しようがないだろう、親父に言われたら」

「ありえないでしょう、こんなこと」

「ありえるさ。お前が何を仕出かすか考えたら、窓の下の間抜けな見張り番だって引き受けるさ。これは、石渡家の問題でもあるんだ。笹原さんには、俺から話をした。お前の退職届けも

受け取つてくれた」

多枝には、信じられなかった。

「それって、社長は今日のこと、知つてたの？」

「さあ？ でもまあ、戸田新社長の足を引っ張つて、サクヤグループ全体を困つた立場に追い込むほど、彼は浅はかではないつてことだ」

多枝は、口を噤んだ。

「今、サクヤグループは切り捨てられるかどうか、瀬戸際なんだ。

アメリカとの関係、中東との駆け引き、日本は決断しなくちゃならない。笹原さんは、自分の都合で、サクヤグループを巻き添えにするわけにはいかないと言つていた」

見上げる兄の視線が、多枝を嗜めている。それが、余計に腹ただしい。

「全然わからない。笹原さんが何をしたつていうの？ サクヤグループは、普通の会社よ。自分の都合とか、日本の決断とか、全然わからないわ」

「これから報道されるだろうが、昨日の夜、PDFLの議長が暗殺された。犯人は、サクヤと名乗っている」

「なにそれ？ 日本人なの？」

「いや、おそらく、反乱軍の生き残りだろう。塚田瑛佑は、いまや彼らの救世主だ。たった一人で、土地を奪われた難民を率いて、彼らが生き抜くための道を切り開いた。あの砂漠には、

彼を殺した政府を憎んでいる人間がたくさんいる」

「それと笹原さんに何の関係があるの？」

「それは、お前が一番良く知っているだろう」

兄の言い放った言葉は、多枝の胸に突き刺さった。

多枝は、窓を閉めた。

（社長は、私が戸田新社社長就任をひっくり返そうとしているのを、知っていた）

だから、今この時にそれをさせない為に、石渡家の頼みを承諾したのでろう。

（いったい、父や兄たちは、どんな取り引きをしたんだろう。いつもそうだ）

サクヤグループと、あんなにも近い関係にいたくせに、ちよつと情勢が悪くなると、サツサと逃げ出す。石渡家の名に傷がつかないよう、裏取引をして、多枝を取り戻すことにした。そういう身勝手な人間たちなのだ。

それに乗った笹原社長も笹原社長だ。

（これがサクヤグループのため？ 社員、家族のため！ そんなモラル、クソ喰らえだわ！）

蹴飛ばした椅子が、ベッド脇の書棚に当たった。アルバムが落ちた。開いたページには、塚田瑛佑を真中に笹原社長と多枝の写った写真があった。

（あれから何年たっただろう）

黄ばんだ一枚の紙が挟んであった。現地で、瑛佑が訳してく

れた古い意見広告である。

占領は外国勢力による支配を意味する

外国勢力による支配は、抵抗運動を生む

抵抗運動は、それへの弾圧を生む

弾圧はテロと報復テロを生み出す

テロの犠牲者は、ほとんど罪のない人々だ

占領地を抱えることは、私達を殺人者の国民に変える

ただちに占領地から撤退せよ！

今、確かにその通りになっているのかもしれない。

でも、私たちは日本人だ。日本に住んでいる。ここは砂漠ではない、日本だ。そして、瑛佑もまた日本人である。巻き込まれただけ。何の私心もない。シスターコンプレックスのぼうやが、小さな弟妹を抱えて逃げ惑う少女を救いたかっただけではないか。

まして、笹原にいたっては、塚田瑛佑を見捨てられなかった。切り捨てることができなかつただけのこと。海外からの圧力に負けて、サクヤグループをテロ支援の企業扱いするなんて……。

悔しくて涙が零れた。

（本当はわかっている）

父や兄たちは正しい。一目散に逃げ出したくなるほど、分の悪いことが多すぎる。こんなことに巻き込まれたら、何が起ころのだろう。平安に飼われた日本人にはわからない。宣戦布告は、偶然起ころのではない。相手は、その機会を狙っている。

落とし入れたがっている。

(やっぱり、このままじゃいられない)

多枝は、休場に連絡をとった。呑気にも、栃木にいろとの返事だった。

「信じられない。この大事なときに。とにかく、私を迎えに来て」

「わかったけど、俺がここにいるのは、笹原さんに頼まれた用事のせいで、好きでこんなとききたわけじゃないからな」

(やっぱり、社長は休場さんも遠ざけたのだ。味方の手を離して、自分一人で対処しようと……、うううん、社長は私たちを味方とも思っていないのかもしれない。あの人は、いつも一人で立っている)

多枝は、携帯で兄嫁に電話した。悪知恵では、兄には負けないつもりだが、わざわざ手の混んだ細工をするまでもない。

多枝には余計なこととか思えない、笹原の外面の良さが役に立つ。サクヤグループという大企業のトップがにこやかに自分に話しかけてくる。それが、兄嫁の名誉欲を満たすのさだろう。

兄嫁は、笹原のファンである。

多枝は、泣きそうな声で、笹原の窮状、兄のひどい裏切りを訴えた。

「わかったわ」

兄嫁は聡明だが、理知的ではない。多枝から見ると、わけの

わからない人物である。が、兄にとつてはわけがわからないではすまない、妻なのだから。兄はすぐに窓の下からいなくなつた。果たして、兄嫁がどんな手を使ったのか。あとあとの事を考えると気が重かつたけれど、そんなことを推察している場合ではない。とにかく家を抜け出し、日の暮れる頃には待ち合わせた休場の車で、本社ビルに到着した。

決着はすずに着いたことであろう。各フロア、シーンと静まり返っている。退社時間を過ぎていとはいえ、いつもならまだ十分に人の残っている時間帯である。

まず、秘書室に行った。後輩たちが泣きながら口々に、今日の解任劇の顛末を話してくれた。

「社長は、全然口を挟まないから、どんどん戸田部長の云う通りに会議が進んでいって」

「くやしかった」

「お茶、頭からぶつかけてやりたかった」

いつもは、上品ぶっている新人秘書の彼女らしからぬ発言も、聞き咎めるものはいなかった。笹原の最も身近にいる秘書課は、笹原派である。が、どこの部署もそうというわけではなかったのさであろう。

(だから、こんなことになったのだ)

多枝は、自分たちが社長と仲良しだなどと思ったことはない。軽口は言うが、基本的には、笹原は誰とでも話し、誰とも近付かない。戸田を含め、敵味方もないが、腹心の部下も懐刀も右

腕も持たない。皆、等距離なのである。

「社長は？」

「部屋にいるはずだけど。荷物整理だとか言ってる」

多枝の問いに、まだ鼻をぐずぐずさせている後輩が答えた。

「社長の所へ、行く気？」

秘書室最古参の先輩に尋ねられた。

「はい」

「だったら、伝えて欲しいことがあるの。社長、携帯も切ってるし、内線にも出てくれないから。」

今、二十三階の会議室に、このままじゃ帰れないっていう人たちが集まっているの。夜明かししそうな勢い。戸田側が警備員を使って、実力行使でも始めたら、望むところって雰囲気よ。マスコミにも吹聴して騒ぎを起こしたいんだと思うけど……。

私はね、むしろの方がすつとするけど、会社のこれからを考えたらそうもいかないでしょ。社長が顔見せてくれれば、どうにか納まると思うのよ」

残っているというのは、戸田部長のことをいっしょに、調べてくれた仲間たちである。閉じ込められていた多枝は仕方ないとしても、多枝一人で戸田のあらゆる捜しをしていたわけではない。協力者たちがどうしているか気になっていた。

「そんなの、この秘書課の人間だってみんな納得なんてしてないわ。どうにか戦いたいけど、社長にその気がないんじゃない、どうしようもないじゃない」

多枝の同僚が口を挟んだ。

「わかりました。社長に会議室へ行って頂くよう話してきます」

「いや、俺が会議室に連れてくよ」

いっしょにいた休場が言った。

最上階。天空の部屋。

「荷物整理じゃなかったんですか？」

休場の声に、笹原はゆっくり振り返った。窓辺から街を見下ろしていた。

「この景色も見納めだからな」

「自分でそういう風に幕引きしたんじゃないんですか？ 石渡さんがたいそう怒ってましたよ」

「石渡さん？ ああ、多枝ちゃんのことね」

「彼女を多枝ちゃんなんて呼ぶのはあなたぐらいですよ」

「君は同級生だから、頭が上がないんだろう」

「違いますよ。彼女は、才色兼備、いや、そんなもんじゃない、完全無欠ですからね。学生時代から、多枝ちゃんなんて呼ばれているのは聞いた事もない」

笹原は、また、外を眺める。

「二十三階の会議室にこのままじゃ帰れないっていう連中が集まっているそうです。顔を出して宥めて欲しいって……」

休場がここに来た用件を伝えようとすると、

「葉子さんが君に頼んだ、書くことってなんだろう」

笹原の言葉が、休場を遮った。そう問いかげながらも、笹原は向こうを向いたまま。夜の中に浮かんでいる。

「この前、面白い人物とあってね、彼の研究している、砂漠で食物を作る話を聞いたんだが、彼は言うんだよ。飢餓から子どもたちを救いたいと、この研究を始めたのに、食物が潤沢になると人口も増えて、また飢餓に陥ると」

「それは極端でしょう」

「そうかもしれない。お腹を空かせた親が、お腹を空かせた子どもを抱いている姿は痛ましい。でも、この飽食の街で、餓死する子どもも痛ましいよ」

笹原の視線は、眼下のイルミネーションに注がれる。

「僕に何を書けと言いたいんですか？」

休場が、笹原の言わんとすることを尋ねる。と、笹原は、まるで自分がその話題を持ち出したことさえ、忘れていたというように意外そうな顔をした。

「……」

そして、

「二十三階の会議室に行けばいいんだね」

と、応えた。

その部屋に入ると、

「社長」

「社長！」

あちこちから声があがり、人の輪が笹原に向かってぐつと近づいた。

多枝たち秘書課の人間は、人で溢れかえった会議室の後ろのドアからどうにか中へ潜り込んだ。

「このままでいいんですか！」

「戸田部長じゃ、タイでのプロジェクトは進みませんよ」

「IT開発部の重要性は、あの人じゃ理解できない」

「サクヤグループを切り売りしようってんじゃないですか！」

「なんで、社長は弱腰なんです？」

「戸田にこれからのサクヤグループを任せるなんて。無理です！」

「自分たちには、いつもあきらめるなって……」

一斉に部屋のあちこちから声がかかる。

「なんで、こんな」

涙ぐんでいる女性もいる。

（彼女は、何に涙しているのだろう）

笹原は誤解である気がした。ここはビジネスの場である。こんな風に感情的に言い合っても意味がない。

「今回の解任は」

笹原が口を開いた。部屋は静まった

「社内の派閥争いというわけではない。私が実際問題として、この社に対する……」

笹原は、言葉を考えて。

「経営の手腕を問題視されて、解任されただけのこと、ある意味非常に個人的なことと受け止めてもらっていい。戸田君は、今まで一緒にやってきた君たちの処遇をどうこうするわけではない。むしろ、リーダーとしては、彼の方が正しい資質を備えているかもしれない。とにかく、君たちは無用の心配をすることなく、仕事を続けていって欲しい」

「そんなことじゃありません！」

涙ぐんだ女性ももの凄いい勢いで、食ってかかった。熱心に、多枝の手伝いをしてくれた人事部の女子社員である。

「そんなこと……っつて」

笹原は、たじろいだ。いつもの彼らしくない。完全に女性の剣幕に押されている。

「なんで、いつもそうなんですか。私のことを言いたいんじゃないんです、社長がここまで、作ってきた会社じゃないですか！」

「いや、それは、会社は個人のものではないから」

笹原の声が小さい。

多枝は、ため息が出そうだった。

（なんでこんなに頭がいいのに、こうも人の気持ちがわからな

いんだろう）
それは、誰だって自分を可愛がってくれる人間が好きだ。でも、世の中には、公平な人間に心を寄せるものたちもいる。正義の味方であれ、というのではない。正義の在りかなどわから

ないのだから。ただ、公平であって欲しい。そうすれば、報われるかどうかに納得がいく。人が公平な目を持つことの、いかに困難であることか。笹原の強みは、そこにある。彼についていきたい人間には、それが見えている。

「私は、社長についていきたいんです」

「……」

「私たちは、あんな戸田ぶつちよじやなくて、社長が好きだからここに集まったんです」

笹原は、もう完全にギブアップだった。女子社員の抗議には、論理がない。何を言わんとしているのかもわからない。好き嫌いで、論じようもない。

「すみません。彼女は非常に興奮していて」

女性に代わって、一人の男性社員が進み出た。

「もちろん、今の好きと言う発言は、不適切です。亭主である俺からしたら、なおさら」

緊迫した空気の中から、笑いが漏れた。

「社長はこれからどうなさるんですか？ みんなはそれを心配しています。いろいろなことを全部社長が背負って辞めることになるんでしょうか？ 戸田部長のそういうところに自分たちは、納得できないんです」

多枝は、その納得できない、という言葉が一番しっくりくる。

（そうだ、私たちは納得できないのだ。今聞いた話の限りでは、笹原は全面白旗で、サクヤグループを追い出される。なんら反

論していない。なぜ？ 戸田だって、知っていたはずのことはたくさんあるのに」

好きだから発言にはコメントのしようもないが、こういう質問なら答えようもあった。

「納得できなくても我慢してもらうしかない。それが君たちの家族を守ることだ。私は、娘を亡くしている。娘のためなら、何でもしたと思う。家族のために我慢するのは、当たり前のことだ。私は、大丈夫。もともと何も持っていなかった人間だ」

笹原は、ゆっくり部屋の中の人々を見渡した。ほとんどの者の顔はわかったが、残ったのが、なぜ彼らなのかはわからない。

「みんな、すまない。これから、サクヤグループを守っていつてくれ」

笹原らしからぬ、理屈に合わない締めくくりだった。謝ることも、会社を私物のように語ることも。自然とそう口にしていく自分を、笹原自身が不思議に感じていた。

笹原は、皆を帰してから、地下の駐車場で、休場の車に乗り込んだ。

「笹原さん、あそこは泣くところですよ。ありがとう、そんなに私のことを思っていてくれたのか、とかなんとか絶句して」

「人のことさかかかに、楽しむのはやめてくれ」
「そういうの苦手ですよねえ。身近なところにいい師匠がいる

じゃないですか。大悟によく習うといい」

「冗談じゃない。なんであのトラブルメーカーに、習わなくちゃならないんだ」

笹原がどう言おうと、これが、笹原の弱点で、大悟の強みだ。

「それにしても、なんかいやな感じですね」

「なにが？」

「笹原さんのその肩の荷を降ろしたような、すっきりした感じがですよ」

休場は車を発進しようとする動作を止めた。コンクリートの柱の陰から人影が現れた。女性が車に近付いてくる。

「あつ、忘れてた」

休場の思わず上げた声に重なって、女性が口を開いた。

「休場さん、私のこと忘れてなかった？」

女性は多枝だった。笹原が声をかける。

「やあ、多枝ちゃん、あのしかめつつらのお父さんのところから、よく逃げて来られたね」

まったく、いつもと変わらない。葉子の死んだ翌日のように、からかうような口調で多枝に話しかけてくる。でも、今の多枝にはわかる。そんな笹原の言葉を受け止める多枝のほうが変わった。笹原とともに、長い年月を過ごしたから。

涙が溢れた。

笹原にとって、他の女性はともかく、多枝が涙するなど有り得ないことだった。これには、敵わない。

「いやいや、君のお兄さん、迫力あるからね、退職届けは受けとらないわけにはいかなかったんだよ。僕は優男で、非力だからね」

「誤魔化さないで下さい。なんで、やめるんですか」

「誤解だ。辞めるんじゃないくて、辞めさせられるんだから！」

「今まで、切り抜けようと思えば、なんだって切り抜けてきたじゃないですか。あんな戸田馬鹿ノ介になんか……」

あとは、もう言葉にならなかった。

笹原は、多枝にハンカチを差し出した。

「一度こんなことしてみたかったんだ。多枝ちゃん、お化粧落ちるよ」

（こんなときだって、この人は誤魔化す。じゃあ、一体あなたはどこで、涙を流すの？）

遺伝子

一時に、『あの部屋』で話がある。海老沢はそう言った。

休場は、海老沢からのその電話に

「笹原さんも来ますか？」

と尋ねた。

「来るよ。家でごろごろしてたから、すぐにつかまったよ。休ちゃんもヨリになんか用があった？」

「用とかそういうことじゃないでしょう。あんなことの後ですからね、どうしてるかと思っても、用もないのに電話もしにくいし」

「そうか、そう考えれば、こんなことでもなけりや、あいつをこんな簡単に呼びつけるなんて出来ないな」

「先生は、笹原さんのこと心配じゃないんですか？」

「あいつは、こういう時、必ず弓子さんのいるおうちに帰るんだ、昔からね。とにかく、今日会っても仕事の話なんてするなよ。ヨリは、もう立ち止まった方がいいんだ」

「でも、笹原さん、会社を手放してほっとしてるように見えて。だからなんか」

「休ちゃんは、デリケートだねえ。何を心配してるの？」

「なんだかわからないけど、心配なんです」

「俺も心配だよ。今は笹原より、弓子さんのことが」

「弓子さんどうかしたんですか？」

「まあ、人間長く生きていけばいろいろあるのよ、休ちゃん」
電話は、海老沢が話を誤魔化すときの台詞で終わった。

休場は、早めに家を出て、昼を海老沢病院の食堂でとることにした。カツカレーを食べながら『あの部屋』のことを考える。そう言えば、笹原も雪那も、『あの部屋』と呼んでいる気がする。海老沢病院の地下にある『あの部屋』、『あの部屋』という名称のなんと似合うことか。秘密を内包して閉ざされた空間。休場

がその存在を知ったのは、四年前である。

海老沢に案内されて、あの部屋に入った。ご丁寧に、エレベーターで地下二階に下りて、そこから物置のような部屋の奥の壁を通って、階段を降りた。その周到さだけでも、どれほどのことと思つたが、それに見合うものと出会つた。

仲野幸枝。本名がなんであるかは知らないが、その名で白居嘉一郎に嫁いだ、葉子・明彦・伽耶子の母親。あの部屋には、その女の遺体が冷凍保存されていた。

医学的なことはわからない。が、世間的に言われている、幸枝が死んだ時、すでにお腹に伽耶子がいた、というのはうそだ。海老沢の説明からすると、それは、胎児というよりは、むしろ卵子だつた。嘉一郎が、それを育てることを、当時の病院長であつた海老沢の父親に命じた。他の女性の子宮に着床させて、育て、産ませた。伽耶子を産ませた。

初めてこの話を聞いた時には、確かに荒唐無稽に思えた。けれど、休場にとつてそれは何回目も荒唐無稽であつたことか。白居家に関する限り、もうこの世の理を外れることに慣れてしまつた。嘉一郎と幸枝の結婚の顛末を調べ上げた時点で、この体外受精を『有り得ない』と言う気持ちにはなれなくなつていた。

嘉一郎は、反目し合う両親の間で育つた。十三歳で異母姉に犯され、その姉自身に、生まれた子どもで脅され続けた。

そんな彼が、どういふ大人に育ちあがつたのか？

嘉一郎には、収集癖があつた。学生の頃から、古美術の他に、蝶を集めていた。アマゾンやチベットまで、出かけて行くほどの収集家だつた。

幸枝の知能の程はわからないが、殆んど言葉をしやべらなかつたという。戸籍もなく、学校にも行かず、気の違つた二人の老婆に育てられ、毎日毎日、白居家の森を駆け回つていた。この女の子の赤や黄や白のひらひらした服の切れ端は、嘉一郎の目にどう映つていたのだろう。

嘉一郎は、家族の反対を押し切つて、関西の大学に入り、四年間家に帰らなかつた。そして、卒業。屋敷に戻つた直後、森の蝶をその手に握り潰した。少女の服を引きちぎり、自分の半分もない細い腰を組み敷いて、その体に精液を流し入れた。十年前とは違ふ。自分自身の意志で射精した。

親や親戚一同の慌てぶりを、彼は嘲笑つた。彼らの知らない四年間。嘉一郎は、父親と同じ暴君となつて戻つてきた。白痴の子どもを正妻に迎えると言ひ張り、周りはその帳尻を合わせしかなかつた。戸籍を偽造し、嫁として迎え入れた。

ここで休場は、富子の証言に注目した。女の子は、そのただ一度の性交で妊娠し、葉子を産んだ。ひどい難産で、瀕死の状態に陥つたという。そのせいか、少女の振る舞いは、益々狂女のそれとなり、周りのものは手をやいたらしい。もちろん、赤ん坊を育てることもしなかつた。と同時に、嘉一郎のことも決

して側に寄せ付けなかったという。

嘉一郎も、再び幸枝に手を出すことはなかった。もう一度子どもを産んだら、こんどこそ幸枝は死んでしまう。嘉一郎はそれを恐れていたようだ。世話係には絶対に幸枝から目を離さぬよう命じ、彼自身は森に遊ぶ幸枝を遠くから飽かず眺めていた、と富子は話した。

葉子の依頼で、仲野幸枝の戸籍を調べ、それが贖物であることを報告した時、葉子は一度だけ、自分の父母のことを語った。

（子供の頃、天女と羽衣の昔話を聞いて、父と母の話のようだったか？）

嘉一郎は、羽衣を隠した漁師のように、天女を手に入れたかっただろうか？ 天女も、漁師の子を産んだのではなかったか？ だのに、羽衣を取り返すと、さっさと天に帰ってしまった。

（そう言えば、漁師は羽衣をどこに隠していたのだろうか？）

そして、七年が過ぎ、明彦が生まれた。葉子のときは、真逆に、誰も気付かぬほどに、たやすく生まれた。そして、狂女は、そのわが子を片時も手元から離さぬほど、大事に育てた。

嘉一郎の生ませた赤子を投げ捨てようとした天女。それでも彼は指一本触れず、見守り続けたというのに。誰ともわからぬ者の子を生み、嬉々として胸に抱きしめている。男は、それをどんな思いで見つめていたのだろうか。

父親が死んだ時、明彦がそれを嘆いたことを、

「明彦本人だけが、父に愛されていないことに気付いていなかった」

と、葉子は言った。

（これがその訳だろうか）

森に遊ぶ赤子を抱いた狂女。それを見つめる収集家。やがて、狂女は桜の古木の下で、突然死ぬ。

それでも、執着は消えなかった。嘉一郎は、幸枝を取り戻そうとした。蝶を捕らえ、標本にしたように、そのままの姿を欲した。彼女の体を凍らせてあの部屋に残した。そして、彼女の卵子を育てた。

（彼は、何に突き動かされて、そんな突拍子もない行動に出たのだろうか。そして、結局、何を取り戻したのだろうか）

一時十分前。休場が、部屋のドアを開けて中に入ると、すでに海老沢も笹原も、そして、雪那もいた。雪那の入院は二日間だけで、すぐに退院したと聞いている。

彼が、部屋に入った途端、

「話を聞こう」

笹原が、海老沢に向かって切り出した。

休場待ちだったということらしい。ため息まじりに海老沢は話を始めた。ここでいつものように（そう急かせるな）と言ったところで、笹原には通用しない。

「遺伝子を調べた。繰り返し様々な角度からだ。

マリアの処女懐胎が、仮に、本当のことだとするならイエスが磔にならず長生きした場合どうなってると思う？」

「処女懐胎？」

（何の話をしようというのか？）

「羊のドローミみたいなこと？」

雪那が尋ねる。

「いや、クローンではなく、あくまで卵子からの分裂だ。でも、受精はしていない」

「蛙では、大人になってもおたまじやくしのままだったって、聞いた事があるような気がするけど」

雪那が控えめに言った。

「万が一、卵子が受精もせず、何かのホルモ的な信号を受け取る、あるいは、なんらかの刺激によって、細胞分裂を始めて、個体を作り出すようなことがあったとしたって、女から男を作り出すのは無理だろう。どこからY遺伝子を持って来るんだ」

笹原が順当な意見を述べた。

「その通りだと思う。」

大体、受精しない繁殖自体が、考えにくいのに、なんで男になるんだか、わけがわからないよ」

（そうか）

休場は、気付いた。亜子を引き取るときのDNA鑑定で、明彦のDNAに何か異常があるのではないかと言っていた。その後にも、富子に笹原の出生の秘密を聞いて、DNA鑑定を依頼

した。白居家の兄妹と笹原、そして友康。今まで、単に検査の不備としか思っていなかった鑑定結果。海老沢は明確な回答をしなかった。あれから五年、ずっと調べ続けていたのか？

「それって、もしかしたら、明彦君のこと？」

「そうだ」

海老沢は頷いた。

「あいつがキリストだって言うのか！」

笹原の口調は、呆れて…… いや、苛立っていた。それを押さえて、雪那が口を挟んだ。

「キリストのことは、おいておきましょう。単なる例え話にこだわっていたら話は進まないわ。海老沢先生の研究結果だけを検討すべきでしょ」

雪那の物言いは、いつも以上に慎重だった。

「調べたかぎり、仲野幸枝・明彦・伽耶子、三名のDNAは全く同一。今の科学では、同じ人物のものとしか考えられない」

「今の科学では……か。逃げだな。逃げ口上だろう。これだけ、形質、男女差まであるDNAが同一のはずがない」

笹原の口調は強まっていた。

「お前にはそう言われるだろうって思ってたよ。だから、何度いろいろな角度から調べ直した。もっと違う意味があるんじゃないかってね。でも、とにかく、今ここのまでの結果を伝えておいた方がいいと思ってる！」

笹原以上に、海老沢の語気も強まって行く。

「何があったの？」

雪那の冷静な一言。不自由な体を動かして、海老沢の方に向き直った。彼の目を覗き込むように、少し体を前に倒す。

（そうだ、なぜ急にみんなを集めて、こんな話を始めた！）

「証拠はないんだが、DNAのサンプルを盗まれたかもしれない、いや、情報の流出というべきか」

「誰に？」

「申し訳ないが、本当にわからないんだ。ユージン・ムーアとの接触については、君たちから警告を受けて、本当に慎重にやってきたつもりだ。というか、実際研究において向こうからの接触はほとんどなかった。ただ、ゲノム解析の分野で、スーパーコンピューターの使用がどうしても必要だった。おおよそ、こちらに好意を持っている仲間うちでまかなってきたが、ここだけはどうしようもなかった。学会自体が敵だらけなのに……」

「言い訳はいい」

笹原の言い方には容赦がない。

「どういうルートで情報が流出したのかだけを、できるかぎり正確に言え」

話を聞くというより、まるで事情聴取だ。

「具体的に、三人のDNAサンプルがなくなつた、ということなの？」

雪那が訊ねる。

「いや、違う。だったらわかりやすいんだが……」

海老沢は説明を続けた。が、どうしても話はいままだ。盗まれたという決定的証拠はないらしい。

「相手の方が何枚も上手だつてことだ」

笹原の吐き出すようなコメントを、海老沢は無視して言葉が続けた。

「どう解析しても、その結果だったから、もつと精度を上げたいと思って、江田尻教授のところの口添えで……」

「江田尻教授？」

笹原が反応した。

「ありえないだろう、あそこの准教授は、杜山ジュニアだ」

「杜山？」

「ハーバードのアリス女史の旦那、女史は恐らく今年ノーベル賞を取るよ」

「あつ……」

そこまで、説明されれば、海老沢にもことのからくりは見えなくなる。

「よりによって！」

あからさまな捨て台詞を吐きながら、笹原は携帯をかけ始めた。海老沢の表情が強張る。

「みんながみんな、お前みたいに頭の回転が速いわげじゃないんだ！ そんな言い方されたらやつてられない、なんでお前にそこまで言われなくちゃ……」

語尾は、乱暴に閉められたドアに呑み込まれた。海老沢は、

荒々しく部屋を出て行く。

笹原の携帯は、どこに繋がったのか。英語で話を始めた。指示を与えている。アリス女史の関係者と話しているのか？ そうしてしゃべりながらも、休場にチョンチョンと指先で、海老沢の後を追うように指示する。

休場は、廊下に出た。結局、海老沢はこの状態を放って飛び出してなど行けない。廊下の隅に、だだっこのように俯いている。笹原の指先のチョンチョンは、宥めて呼び戻して来いということだろう。それこそ、笹原の方が何枚も上手だ。

休場はおもむろに話しかけた。

「前に、弓子さんが、あの外面のいい笹原さんに怒鳴り声を上げさせるのは、僕と瑛佑君と海老沢先生だけだと言ってましたよ」

海老沢は、ふん、と鼻をならし、顔をあげた。

「俺は、大人だからな。こんなことに腹を立ててる場合じゃないことぐらいわかっている。どうせ、あいつを見捨てることなんかないんだ」

そして、部屋へと踵を返した。

その背を眺めながら、休場は、ふと、森の木の陰から、じつと見つめ続ける男の目を思い描いた。

（嘉一郎は、何に嫉妬していたのだろう。）

もし、その狂女がマリアなら仕方ないではないか。彼女に子どもを産ませた男などいなかった。その腕に抱いた赤子が、彼

女一人で生んだ子なら、仕方ないではないか）

森に巣食う者

（あの森へ、人を送り込むことは出来ないのか）

内海は、度重なる失敗に、打開策を考えていた。失敗といつても、具体的な形で現れるのではないから、性質が悪い。自分とて、いつその網に掛かるかわからない。三日前にも一人辞めた。白居の森へ行くまでは、今の自分のように、突然退職した仲間のことを非難していた。

辞めた全員が、自分の辞職は森に潜入したこととは関係ない、個人的な問題だと話す。

「心境の変化とでもいうか、私の人生の非常にプライベートな部分に関係したことなんだ」

などと、尤もらしい口調で主張する。そして、

「白居家に住み着いているのは、本当に取るに足らない浮浪者や知恵遅れの大人や子ども、自立して生活の出来ない人間たちであり、テロなどとはかけ離れている」と言うのだ。

退職していった七人もの人間が口を揃えてそう言う。

（馬鹿馬鹿しいにもほどがある。どんなマインドコントロールを受けたんだ）

内海は、高野洋二こそ最後の切り札ではないか思っていた。

彼の兄は、まさにあの森に巣食う魍魎どもの一匹である。高野洋二と笹原由宜の間の密約を逆手に取ることが出来れば、打開策を見出せるかもしれない。

高野洋二は、異動の辞令を受けた。迎賓館近くの無機質なビルの一室。そこで、突然なつかしい顔と出会った。洋二の元上司、内海たすくである。彼はその後警察署長となり、今は公安にいと、噂に聞いていた。

まず、殺風景な一室に招き入れられ、ビデオを見せられた。外国映画の一場面のような風景。

（日本でいうなら村祭りみたいなもんかな？）

洋二は呑気だった。

突然、ビデオの映像が切り替わった。その後、内海に、ビデオの意味することを説明された。理解できない。

（破壊？ 消滅？ 何を言われているのか、訳がわからない！ 現実？ 有り得ない。話が不可思議過ぎる）

自宅に帰ることは許されなかった。ビル宿舍部分の一室を与えられ寝泊りした。次の日も、次の日も、説明を繰り返された。

そして、決まって説明の最後になると

「君のお兄さんはあの白居家にいるね」

という話になる。

この議論を、もう何度繰り返したことだろう。

「……」

洋二は、答える気にもなれない。

「君と白居家の間に、なんらかの取り引きがあるとしたか思えないんだ」

何を持ってそう思うんだか、こつちが聞きたい。

洋二は、反論する。

「なぜ、取り引きをしなくちゃならないんですか？ 何を、何のために？」

議論はここまでだ。内海は答えを言わない。手の内を見せない。

「確かに、世の中の平均からしたら、親切過ぎるかもしれないけど……」

「親切過ぎる？ そんなもんじゃないだろう！」

「でも、本当のことなんです」

「君のお姉さんが亡くなった時、白居伽耶子がやってきて、お姉さんと白居明彦は交際していたと言った。その後、君の母親と白居伽耶子は手紙のやり取りをするようになった。その母親が亡くなると、今度は、亡くなった母親と、君のお兄さんの面倒をみる約束をしていたと言って引き取って行った」

「……」

「ありえないだろう！ もう少しましな嘘を考えろ！」

「そういう人なんです。彼女は！」

「彼女？ 白居伽耶子のことか」

「伽耶子さんだけじゃない、あそこの人たちは、みんなそうい

う人たちなんです」

「今度は、内海のほうが黙った。繰り返される押し問答。内海はずっと、高野洋二を観察している。この三日間観察し続けてきた。内海の警察官としての勘は、とつくと答えを出している。洋二は嘘をついていない。恐らく、この若者は善人である。」

「失礼します」

入って来た男が、内海に耳打ちした。内海は、部屋の外に出て行つた。何か急ぎの連絡が入つたようだ。

今入室して来た男の訓練された動作にしても、見慣れたものだった。ここが警察の関係機関なのは間違いない。

洋二は辟易していた。

自分に下りた辞令が偽物のはずもない。なのに、なぜこんなにも作り事めいている。日本の警察に勤務して、傷害・窃盗・恐喝等々、日々人々のトラブルに振り回されてきた。それは、どんな意表を衝くものであっても、人の営みのなかにあつた。(これは違う。絶対に違う)

と、洋二は思う。人の理から外れている。こんな事態に直面するなど、考えられっこない。現実と思えるはずがない。これを現実と言うなら、自分の頭がおかしくなつたと思う方がましだ。

内海が戻つて来た。そして、口を開く。

「証拠を掴んだ。奴らが、三十三年前の消失に関与しているという証拠だ。君が奴らの手先でないというならそれを信じよう。何の取り引きもしていないと言うならそれも信じる。だから、

そのことを君自身で証明してくれ！ 本当に君が操られた人間でないことを証明してくれ！」

洋二は、内海の剣幕に後ずさつた。

「もう打つ手がない。時間もないんだ。君にかけてみるしかない。君は嘘を言っていない。君を信じる。だから、あの森を調べてくれ。あそこで何が起ころうとしているのか。なぜ、三十三年前の消失を引き起こした者が、今そこにいるのか」

洋二は、頷いた。おずおずと。頷くしかなかった。この話が多くなにおかしくても、誰も自分に味方してはくれない。みんなこの馬鹿馬鹿しい話を、本当の事だと思つている。少なくともこのビルにいる人間はそうだ。自分を任務につけようとすると警察機構もそうだ。加担している日本の官僚もそうに違いない。

「白居家に潜入、調査する任務についてくれ」

「はっ！」

とつさに、返事をする。警察官として返答を返す。

内海はおもむろに頷いた。

「お姉さんの仇をとるという意味でも、がんばつてくれ」

「えっ？」

高野洋二は、ぼかんとした表情になつた。

(なぜ、ここで姉がでてくるのか?)

洋二のその表情に、内海は自分の誤解を確信した。もう、手の内を明かそう。静かに言葉を続ける。

「私は、高野美津子、君のお姉さんは殺されたのだと思つてい

る」

「えっ？ なんの話ですか？」

洋二は、もう一度、普通に聞き直す。

「君のお姉さんは殺されたのだと思う」

「姉は、心筋梗塞で」

「君は、このことをネタに白居家と取り引きしたのだと思っていた」

「取り引き？」

洋二の様子は、訝しげなだけだった。事の重大さには、気付かない。

「君の口封じに、お兄さんの世話を引き受けたのか、君が白居家を脅しているのか、どちらにせよ、裏取り引きがあると」

洋二は、目を大きく見開いて、何度も首を横に振った。

「姉は、伽耶子さんのお兄さんと結婚の約束をしていたのです」

「白居伽耶子がそう言っただけだろうか？」

洋二は、内海の言葉に耳を貸そうとはせず。言葉が続けた。

「なのに、姉が亡くなって、そのショックで彼女のお兄さんは鬱病になってしまったから、代りに伽耶子さんが母を慰めたいと、そう言ってる」

「私は白居明彦にあったことがある。あれは、鬱病なんかではない」

洋二は、何かに言い訳するように喋り続ける。

「母にとっても、突然姉を亡くしたことはどれほどだったか。

伽耶子さんがいなかったらとても普通ではいらなかった。その母が亡くなって、自分は兄の世話か、仕事か、選ばなければならぬと思っていたのに、大丈夫だからと。同じ東京に暮すのだから、かえって安心できるでしょうと、あの森で兄の面倒を看てくれて。兄が森に暮すようになって、伽耶子さんに会えるようになって……」

『高野美津子殺し』は、初めから内海にとっては、白居家の暗部であり、自明のことであった。証拠がなくても、そう信じて調査を始めた。何年もの間、高野洋二をその加担者とみなしていた。だからこそ、そこに気付いているということを手の内に隠して、洋二と対峙しているつもりだった。

今ここでそれを持ち出したとき、洋二がどう受け止めるか、もっと慎重であるべきだったのかもしれない。洋二の目は、宙を泳いでいる。明らかに考えをまとめる余裕がない。

どこかの世界の不可思議は受け流せても、自分自身に降り懸かった真実を受け止める余裕はないものかもしれない。

駭りの焰

海老沢が白居家のDNA情報を盗まれた。ここ数日、事態収拾の為、笹原はやっきになって飛び回っている。このDNA情報から奴らはどういう結論を導き出すのか。どういう手を打つて来るのか。笹原の焦燥は計り知れない。彼が何か最悪の事態

を思い描いていることは伝わってきた。一体何が起ころうとしているのか？

その夜遅く、休場は海老沢病院で、雪那とともに海老沢から状況の推移を聞いていた。DNA情報が戸山ジュニアからアリス女史を通して、ユージン・ムーアへ流れていったのは間違いないようだ。

そこへ、患者の容態が悪くなったと看護師が報せにきた。

「医者は辞めたんじゃないんですか？」

休場の揶揄に、

「休ちゃん、まあ、そこはね、人間いろいろあるのよ」

と言い置いて、海老沢が出て行く。雪那は残念そうだった。

「本当は、笹原さんと海老沢先生と朗君、三人のいるところで話したかったんだけど……」

何を話すチャンスを探っていたのだろう。

「とにかく、朗君にだけでもお伝えしておくわ。あなたは、書く係ですものね」

雪那は無理に微笑んだ、のだと思う。

「昨日、太郎君が私の所へ来たの。夏休みに明彦さんに会ったことを話しに」

「夏休みですか？ 随分経ってますね」

「きつと、それからずつと悩んでいたんだと思うのよ。そして、思い余って相談しにきた」

「何を悩んで、何を相談にきたんですか？」

「それが…… 具体的には何も話さないの。言えなかったといふべきかしら。太郎君もどこにも答えないことは、わかっているんだわ」

「なんの答えですか？」

「そうね、伽耶子さんが変容していくことの答えかしら」

「変容？ おかしな言葉ですね。でも、確かに彼女は、どんな何かに向かって変化していつてる」

「太郎君には辛くても、きつと今の伽耶子さんが本来の彼女なんだわ。そんな気がする。太郎君が何を望んでも、もう無駄なの。彼女は、あるべき姿に戻ろうとしているのだから」

そして、休場は雪那から、太郎が明彦に会いに行つた時の顛末を聞いた。

明彦が太郎の父親であることを、太郎は知らない。その分、太郎より周りの人間の方が、状況を呑み込んでいる。太郎に向けられた力、その巻き添えとなった看護婦の死を知っている。

だから、むしろ、休場にとつて目新しいのは、無口な友康との会話の中味であった。

もちろん休場は、友康のことも調べている。

友康の祖母にあたる人は、地主のお嬢様であった。彼女は入り婿を取つたが、すぐに事故で亡くす。世間知らずのまま、人に騙されて財産を失い、看護婦となった一人娘の稼ぎでほそぼそと暮すようになった。娘に頼りっぱなしの人生であった。娘

はいい子で、親を大事にした。優しくて誰にでも好かれる子だった。

やがて、娘に男が出来た。妻子ある親子ほど年の離れた男だった。母親が泣いて止めたというのに、娘は、その男、白居忠保の子を産んだ。その上、母親と赤ん坊を残して、男と逃げ出し、そのまま交通事故で死んでしまった。

（そんなはずがない）

母は、呆然と呟くしかなかった。

世間に背を向け、孫とともに小さく小さく丸まって生きた。

嘆きながら、老いていった。

（あんなにいい子だったのに）

死ぬまでそう言い続けたという。

嘉一郎が、友康を引き取ったのは、もちろん憐れみや同情からではない。老婆と孫には、本人たちは知らなかっただろうが、広大な土地が残されていた。米を届けていた農地もあった。老婆が死んだあと、嘉一郎は、老婆の育てていた子どもを引き取り、住んでいた古家以外の土地をみな売り払った。その上、引き取った子ども使用人として、家で働かせた。

友康は、知恵遅れの子と思われていた。何もしゃべらず、のろのろと動く。その姿形も、ずんぐりむっくりとしている。

彼は、生まれてからずっと、柱に縛られていた。犬のように、柱から紐の長さの円で暮らしていたのである。走ることも飛び跳ねることもなかった。食べ物は、握り飯。炭水化物のみ。笹原

とは、違った意味で壮絶な幼少期である。

海老沢は、朝まで患者に付き添ったのか、結局戻ってこなかった。休場は、いつもより遅くなってしまった雪那の朝の散歩に付き合った。

「もうすぐ、冬ね」

白居家の森を歩きながら、雪那が呟いた。雪那の肉を引き摺るような音と足取りは、乾いた落ち葉を踏みしめて、大きな音をたてた。

「友康さんの言う、海老沢病院の窓にいた子は、透子さんなんでしょうね」

休場の質問に、

「海老沢先生が言っていたわ。笹原さんには伝え難いけど、もしかししたら、透子さんの方が人間本来の姿なのかもしれない」

雪那が思いもかけない返答を返す。

「人間本来？」

「海老沢先生は、遺伝子からそう読み解いた。生き物はもともとただの器に作られている。だのに、好き勝手に進化して、この形になった。悪しき進化なのかもしれない。そして、私が、記憶の奥底から思い出さなくてはならないことも、それに似ていると思うの」

「あなた方二人が『読み解く』『思い出す』 それを書くのが僕というわけですか？ 我々三人は、一体何を担っているんです

かね？」

休場の携帯が鳴った。笹原からだった。

短い会話の後、難しい表情で携帯を切る。

「なんて？」

雪那が訊ねる。

「あと頼むって」

「そう」

「どうなるんだろう」

「相手の出方次第ね」

「大悟君は、うちにいるんですか？」

「うううん、帰ってきてないらしいわ」

先に歩き出した雪那が、ふいに立ち止まった。休場は、彼女の視線の先を追った。

「伽耶子さん！」

そこには、伽耶子が立っていた。

太郎を育てているときには、伽耶子も普通の母親のようであったと思う。年齢も、時を止めてしまった明彦より上に見えていた。

それが、今はしみじみ明彦と伽耶子は兄妹なのだと感じる。

すべてを見通す視線は、逆に明彦の何も見ていない目と対をなすのかもしれない。

対峙するように、伽耶子は二人に向き合った。

ここは彼女の屋敷である。その庭に彼女が立っていることに

何の不思議もない。けれど、もう長らく彼女の姿を見かけることはなかった。だのにこの森では、いつでもひしひしと彼女の存在に触れられる。こうして向かい合ってさえ、彼女まで遙かに遠い距離を感じ、なのに、一分の隙もないほどの間近な存在に感^ホに圧される。

一片の微笑みも、二人を認識したという素振りもなく、突然伽耶子は話し始めた。

「私が二十歳になったとき、兄は京子さんという女性と出会いました。彼女を失って兄の心は変化しました。それがなんなのか、あの時の私にはわからなかった。この伽耶子という人の身にあつて、それはただ恐ろしいことだった。あまりに次元の違う何かだった」

なんの話が始まったのか、まずはそれを理解せねばならない。

「葉子さんに、聞きました。明彦さんと京子さんのこと……」

雪那が答える。

確かに、明彦と京子のこととは休場も聞いている。荒唐無稽、というか絵空事としか受け止めようのない恋愛話。

すぐ身近に本多病院長夫人の本多頼子医師がいる。頼子医師は、父親の最期を看取り、待ち続けた本多病院長と結婚。葉子との繋がりに、京子と子どもとの心療内科を開いている。その頼子医師の中に、京子という人格が住んでいたとの話であった。

伽耶子の言葉は続く。

「京子さんは、兄の背を押すエナジーだった」

「背を押すエナジー？」

「恋愛という形が一番わかりやすくメッセージを伝え得る手段だったのかもしれない。その衝撃が、兄を明彦という器から解放する力になる」

「何から解放するっていうんですか？」

休場の問いに被さって、雪那も訊ねた。

「明彦さんは解放されたの？」

「いいえ。私がまだ未熟過ぎたこと、姉の思いが強過ぎたこと、兄が人のままでいたがった、たくさんの因子がありました。兄を解放しようとしないうたくさんの因子。」

そして、兄を封じ込め、パンドラの箱を再び閉じるため、最も有効だったのは、あの桜の木が成したことでしょう」

「……」

「兄の力を振るって、姉を殺した」

休場は、息を飲んだ

「母も、父も、姉も、あの木が兄の力を使って殺した。太郎のことも殺そうとした。友康が、太郎に言った事を聞いて、やつとすべてがわかりました」

雪那は、休場は、言葉もない。

「この星の罫は、人というたんぱく質だけに仕組みられたのではなかった。すべてが私たちをからめとるために準備されていた。

友康は、神に仕える巫女のように、兄の望みを叶えて、兄を慰めている」

「なんののぞみ？」

「彼岸の眠り」

高野洋二は、白居家の森にいた。

これは、任務なのだろうか？ いつものように、兄に会いに来ること。

兄に会う。いや、今までだってそれを会いに来たと言えるものかどうか。兄はそこに立っている。無反応に。冬木立の一本のように。この森の一部のように。

兄の姿を眺める時、洋二の視野に兄を世話する女性たちが入る。彼女たちの手。上着を羽織らせる手。食事に連れて行く手。肩の枯葉を払う手。こうしてじつと兄を見つめながら、洋二は、まわりに差し伸べられた手を見ている。それはかつては、母や姉の手だった。

姉は、洋二にとって母親そのものである。兄の世話にかかりきりの母に代わって、いつも洋二の手を握ってくれた。ちり紙で鼻をかませ、ハンカチで口の端の牛乳を拭いてくれた。手の汚れを洗い、かじかんだ足を暖めてくれた。少し大きくなると、姉の不幸がわかった。洋二の世話で、姉のたくさんの時間が奪われていることを感じた。だから、看護婦になりたいと言ったときには、応援した。姉の代わりに今度は自分が家を守るから心配しないで、と胸を張って姉を送り出した。でも、それとて子どもの浅知恵で、本当は姉が稼がねばならなかったのだ。父

が死んで、洋二の学費が必要だった。

だからこそ、心の底から、幸せになつて欲しい人だった。ただ、ただ、幸せになつて欲しかった。それなのに、突然死んでしまった。

洋二は、伽耶子から、姉が、彼女の兄の婚約者であると感じたときうれしかった。家を出たあと、姉がただ家族のために働くのではない、幸せな時間を持てたのだと思つた。伽耶子の兄と肩を組んで歩く姉の姿を思い描きたかつた。いや、今までそう思つていた。

どうして十年以上経つた今、姉の死は病死ではなかつたなどと言われねばならないのだ。

「洋二さん、こんにちには。ぼんやりしてどうしたの？」

突然声をかけられた。

「あつ、こんにちには」

とりあえず、挨拶をかえす。

よく見かけるボランティアの女性の子どもだ。久しぶりに会つた少女は、子どもから娘に変化していた。もともと背は高かつたが、ぶっさら棒にニョキツと伸びていた手足が、しなやかに見える。洋二に話しかける視線に、子どもの無遠慮さがなくなつた。

「いいお天気だなあ、と思つて」

「そう？ 曇つてるけど」

物言いののはつきりしているところは変わらない。

「そ、そうだね。あれ？ これから学校？」

「ううん、私は開店休業」

「開店休業？ ああ、自主休講つてやつかい？ お母さんは知つてるの？」

少女は、森の木々の向こうに見える海老沢病院を振り返つた。

「海老沢先生に、部屋に閉じこもつてばかりいないで、頼子先生のお手伝いでもしてきなさいって、追い出されたんだもん」
彼女は、大きな斧を三本も持つていた。持つているというか

ほとんど引き摺つて歩いてる。

「重そうだね」

その台詞を待つていましたとばかりに、

「洋二さん、暇なら手伝つて下さうい」

甘つたれた声を出した。

分院の周りの下枝を落とすので、斧を三本母屋から借りて来るように頼まれたのだと言う。

「そりやね、二本なら手は二本あるんだからいいけど、二往復はいいやだなあつて思つていつぺんに持つたら、結構重いんだもん」

二本の斧を持たせられた洋二は、彼女の他愛ない話を聞きながら、少女の後に続いた。

伽耶子の部屋の外、桜の古木の脇を通る。頭から、姉の死を追い払うことは出来ない。いつのまにか、少女の言葉は途切れ、

静けさが落ちてくる。

洋二は、少女が皆から『あこちゃん』と呼ばれていた事を思い出した。

「あこちゃんというの、あさこちゃん、あつこちゃん、何て言う名前？」

心の揺れを隠すように、声を張って訊ねた。

「この部屋が、お姉さんの亡くなったところ」

「えっ？」

「十二年前」

「えっ？ 誰の？」

「伽耶子さんと明彦さんのお姉さん」

「そうなんだ」

洋二は、心臓がばくばくと鳴る気がした。心のうちを見透かされたかと。

「誰だと思ったの？」

神経質になり過ぎている。

「別に誰だとも思わないよ」

苦笑いで誤魔化すしかない。

「洋二さんのお姉さんかと思った？」

亜子の顔をまじまじと見た。亜子の目も、洋二をまじまじと

覗き込む。

「何を言ってるんだ！」

語気が荒くなった。

亜子は、剣幕をかわす様に、ぴよんと飛び退いて、くるりとこちらへ向き直った。桜の古木を背に洋二を見ている。

「なんの話だ！」

（こんな所でこんな子から、偶然に姉の話が出るわけがない）少女は、少しだけ、小首を傾げる。

「知ってるよ、洋二さんのお姉さんは殺されたって」

「君は、幾つなんだ？ 十二年前の話を知っているわけがないだろう！」

風の音でも聞くように。

「だって、聞いたんだもん」

「誰に？」

「この木」

首を伸ばして、木を仰ぎ見る。

「ここでは、いろんなことが起きた。この木はずっとそれを見ていた」

「鳥が飛び立つように伸び上がる。」

「十二年前、何があったんだ」

洋二は、自分の問い詰めているのが、十三歳の少女であることを忘れた。それは、桜の精だった。魔性のしなやかさを持った枝で、髪を掻き揚げる。

「教えてあげようか？」

「人形のように意志のない、ビー玉の目が見据える。」

「あの人が、人の殻を破る前に、蓋を閉めねばならなかった

あの人は、もう一人の半身より扱いやすい

あの人は、もう一人の半身より脆い

姉を殺せば、壊して虜にできる

これ以上、欠片を増やしてはならない

新しい欠片は打ち砕かねばならない

亜子は、童歌のように言葉を紡ぐ。

「葉子さんが死んで、太郎君が生まれた。明彦さんは太郎君を殺そうとして、誤ってあなたのお姉さんを殺した」

内海警視から、告げられた言葉。内海警視から、突きつけられた事実。内海警視に、押し付けられた真実。

「違う、姉さんは病気で死んだんだ！」

警察官をやっているも、殺人事件など出合ったこともない。

普通の中に、そんな事は起こらない。

内海の言葉からも、亜子の言葉からも、本当のことは何も伝わってこない。人が、人を殺すというのはどうということなのか。

伽耶子がいた。

中庭を通って、自分の部屋に帰るところであろうか。

少し離れた木の陰から姿を現し、亜子と洋二に視線を向ける

こともなく、スーッと部屋の前を濡縁へと歩いて行く。

亜子がどきりとした様子で彼女を窺う。

「伽耶子さん」

洋二が声をかけると、彼女は洋二を見た。彼を認識したのかどうかも窺い知れない目だった。

「あなたのお兄さんが、姉の婚約者だったというのは嘘だったんですか。あなたのお兄さんが姉を殺したのですか？」

何の駆け引きもない。もう彼女の目の前で、言葉を取り繕う人間はいないだろう。彼女の目に、人間は、人間としてしか映らない。高野洋二はいない。そこに立っているのは、単なる高野洋二というプレートをつけた人間なのである。

「嘘です。兄が高野美津子さんを殺しました。正確に言うなら、兄の力が高野美津子さんに振るわれた」

「そんな、いまさら……」

姉が死んでからの十二年間すべてがうそだったということか。最も大事にしたかった人だ。最も幸せになつて欲しい人だった。姉は、十分に若かった。彼女が幸せになるための時間すべてが奪われた。

最悪なのは、今、兄の面倒をみているのが伽耶子だということだ。洋二自身、のうのうと気付かずにいる。姉の死を代償に、自分たち兄弟は安穩を得ていた。姉に婚約者がいたという嘘に、勝手な慰めまで見出して。

(赦せない！ 自分自身が許せない)

こんな状況に追い込んだ伽耶子が憎かった。本当は、ずっと彼女を心の支えに生きてきたこと。それが、無残に抉られる。

痛みに目が眩む。憎悪に息が止まる。

(この目の前にいる女が！)

高野洋二の斧が振り下ろされた。

逮 捕

その日は、朝から日本中が大騒ぎだった。異例の総理候補とまで謳われていた開眼大悟と元サクヤグループのトップであった笹原由宜の癒着が新聞の一面を飾った。サクヤグループの母体であった白居株式会社の所有する白居家の森と、隣接する海老沢病院。その土地の価格を引き上げるために、かねてから計画されていた地下鉄の工事呼び込み、駅建設予定地さえも変えさせたというのである。

確かにスクープではあるが、政治家と企業の癒着である。通俗的な観点から見ても、ありえないほどのこととも思えない。

これほどマスコミが騒ぐのは、開眼大悟のせいであろう。彼の人氣が、マスコミを過熱させる。あんなにも、無私の人と吹聴されていた男にも闇の部分があった。なんとセンセーショナルであることか。視聴率を煽る。それまでの露出度が高いだけに、叩く種もばら撒かれている。マスコミそのものが、思い切り持ち上げたポテンシャル。それを叩き落とす快感がある。

その上、対になる相手が笹原由宜というのは、あまりにうつつけだ。大悟とは正反対の男。一気に、サクヤグループを一気企業に押し上げた欲にまみれた人間である。混沌の中を生き

て来た。暴けばどれほどの蜜が溢れ出るか。人の羨望を集め過ぎた。隙あらば叩かれる。いや、でっちあげても、追い落としたがっている人間はたくさんいる。

正反対の二人だが、敵の多さという点では似ている。清廉の人である大悟、欲で動かない彼を、煙たがる人間はたくさんいる。次の国会で、議員定数の是正から、天下り、外交問題への口出しまで、大悟の仕掛けるであろう大芝居に、戦々恐々の人々がどれほどいることか。

彼らは、どちらにしても、何が何でも、検察の手が入ることを望んでいた。

その日の午後には、癒着から背任・横領にまで、話は膨れ上がった。笹原が、サクヤグループを追われたことで、その弱みを徹底的に穿り返したらしい。午前中の逮捕劇で戸惑っていたのは、逮捕される側の笹原よりむしろ、逮捕する側の検察であつたかもしれない。

(どうするべきか?)

これが、ユージン・ムーアの打って出た手なのか？ 自分たちより先に、明彦の力を読み解いたのであろう。彼は、アメリカで消失を引き起こした赤ん坊のDNAを、持っていたに違いない。

明彦とその母、妹が同じDNAを持っている。同一のDNAを持つ人間が存在するという事実を知った。それが何を意味す

るのか？ 規模は違うが、笹原は破戒を目の当たりにしている。明彦が人を、木を、木端微塵に消し去った事実を知っている。

赤ん坊も同じDNAを持っていたのではないのか。同じDNA、同じ能力、同じ惨事。最悪の事態が思い浮かぶ。

ユージン・ムーアは、世界の崩壊を恐れている。彼の組織も、経歴も、生い立ちに至るまで徹底的に調べ上げた。彼を理解しているつもりだ。彼は正義の味方と名乗っている。そうだ、それは正しい。きつと正しいのだ。

これから何が起ころうとしているのか。

弓子と亜子は、避難させた。

伽耶子は太郎を、友康は明彦を守るだろう。

休場と雪那には、指示を与えた。

きつと、瑛佑はうまくやってくれる。

葉子は正しかった。

(では、自分は何をすべきなのか)

笹原は何の手も打たなかった。若かった頃の彼からは考えられないことだろう。みすみす敵の罠に嵌って行く。

(どうしたいのか？)

答えは、何もなくていい、だった。もうこのまま運命に身を任せ、終わってしまったても仕方ない。それでよかった。塚田瑛佑と関わったことが、そう思うようになった一因かもしれない。

砂漠で様々なことを見た。

土地・宗教・信念・夢。

執着は、生きる活力であろうか？

白旗を揚げて投降する老人たちが、撃ち殺されるのを見た。

銃撃から逃れようと、高いビルから次々と飛び降りる子どもたちが、潰れていくのを見た。

放射能汚染地区では、透子よりもっと卵に近い赤ん坊を見た。

そして、日本に帰った。

遠い異国の地で悲惨な思いをしている人のいることを知った。彼らのために何か力になれる活動をしよう。そう思えば、良かった。そうして、心と解出来れば良かった。

平和な日本にいても、見せつけられる。

崩壊したクラスで息を殺して毎日を過ごしながらついに空へ

飛び降りてしまった少女。

赤ん坊に戻ってしまって、叩き殺される老人。

オートバイの台座に詰められたまま、窒息死した子ども。

人の命がつぶれ、人の心がつぶれる。

笹原は、ウロボロスの蛇のように、頭に追いつかれようとしていた。自分のパツクリと開いた口に、しっぽから食われていく。虐待の日々や透子の記憶が、年月を隔てて遠ざかるのではなく、彼を追いかけてくる。狂った姉と怯えた弟の間に生まれた命。笹原は自分の根幹に身震いした。おぞましかった。自分の存在が、世界を汚している。人の残虐、浅ましきは、すべて

自分の中にある。

昨夜、一週間前のP D F L議長暗殺の場面が全世界に配信された。犯人の姿をはっきりと確認できた。サクヤと名乗ったその青年を笹原は知っている。

彼は、目の前で父を殺された。母を殺された。兄を、姉を殺された。小柄な男の子だった。助けてと懇願して組み合わせた両手を切り落とされ、道端に捨てられた。瑛佑が拾って、面倒をみた。少し大きくなって、いなくなってしまった。

どんな組織に入って、どんな人生をたどったのか。

彼は、血の通わない義手で人を殺した。

丸い目の両手を失くした少年は、人を殺す者となって、笹原の目の前に戻って来た。

何の憤りも感じない。みな同じだ。ただただ、人は繰り返すばかり。

自分のようになったら、人はもう生きていけない。少年は恨んで生き抜いたのだろうか。自分は取り戻したくて生き抜いた。失ってしまったものを手に入れたかった。

今はもう何もいらぬ。何も見たくない。

開眼大悟、笹原由宜は、拘置所へ収監された。検察にとって、有り得ないほど安易な逮捕だった。どういう圧力によるものか、推測することも憚られた。

その直後、今日二度目のニュース速報が流れた。渦中の白居

家で殺人事件が起きたという。現職の警察官である高野洋二巡査長が、白居家邸内において、浮浪者に斧を振り下ろし殺害におよぶ。その際白居家当主である白居伽耶子さんも巻き込まれて、重体とのことであつた。

核ミサイル

内海は、焦っていた。

高野洋二が、殺人を犯した。

(何故?)

辞めていった上司、同僚たち。あそこ森には、人を狂わせる何かがある。そこへ、無防備にも高野洋二を送り込んでしまった。彼が伽耶子と何の取り引きもなかったのなら。スパイという形で送り込もうとしたことに、罠を仕掛けられたのだとしたら。

(俺のせいかな！)

自分の判断が、一人の若者を破滅させてしまった。

内海は昨日、高野洋二にすべてをぶつけた。サクヤグループを手に入れるため、笹原と海老沢が身重の白居葉子を死なせたのだと説明した。それに気付いた洋二の姉を殺し、その隠蔽のため、伽耶子は、洋二たちに近付いた。そう話すと、

(それは有り得ないことです。あそこは、人間の欲から一番遠い場所だ)



高野洋二は、搾り出すような声でそう答えた。内海は、その返答を打消し、状況証拠を挙げ立てた。すべてを偶然で片付けることなどできないと主張した。

（突然、こんな事を言われて動揺するなという方が無理だ。でも、本当に有り得ないことなのか？ よく考えてくれ）

部屋を出る高野洋二の後姿は、悄然としていた。

今朝、高野を逮捕したのは、ついこの間まで、内海が署長を務めていた警察署である。連絡を取ろうと、電話に手を伸ばした時、ユージン・ムーアと呼ばれた。

「こんなときに！」

なんであれ、話は後にして欲しい。今は、高野洋二をどうしたら救えるかを考えさせて欲しかった。

ユージン・ムーアは、内海のそんな思惑を知ってか、気にかける必要も感じないということか、とにかくすぐ部屋に来るよう急かした。

「すみませんが、また、後で伺います。とりあえず、高野洋二の件で、動かねばならないので」

そう答えて、内線を切ろうとする内海に、ユージン・ムーアは喋り続けた。

「全世界に……私がこの消失についての映像を見せ、協力を仰いだすべての人たちに、白居家がその拠点であり、近い未来に同じことが起こるであろうというメッセージを発信した。世界中のミサイルの照準が、日本の東京、花里という地にあわせ

られている」

ユージン・ムーアの、突然の思いもかけない言葉に、内海は話の矛先を見失った。

「ばかな！ 何を言っているんです！」

内海は、ユージン・ムーアの部屋へ走った。ドアを開けると、彼は真正面に立っていた。

「あの日、赤ん坊が撃ち殺されるまでの数分で、消失はあの広がりを見せた。相手が赤ん坊ではなく、すでに成人だった場合はどうなのだ。一人ではなく、複数だった場合はどうなのだ」

「あなたは、キチガイだ！ そんな推測だけで、どれほどの馬鹿げたデータラメを、世界中に喚き散らしたんだ！」

「世界が消えてもいいのか！ 地球が消えてもいいのか！」

「そんなことはでたらめだ！」

「あの日あの場所にいなかった君にはどんなに言ってもわからない。あの力は、そういう力なんだ。あんな映像では決して伝わらない。あの力は、そういう力なんだ。蟻も人間も大木も山も区別しない。」

あの力は、そういう力なんだ！」

内海は呆然とした。このひなびた老人に何を言っても通じない。日本は消されてしまう。

「私は、正義の味方だ。私も君たちとともに消えよう。だから、世界を救ってくれ」

「君たちって誰です。日本の人口をご存知ですか、いや、東京

だけだって千三百万の人たちがいる。生活して、生きているんです」

ユージン・ムーアに内海の言葉は届かない。

「私の母は正しかったんだ。いたいけない不幸な赤ん坊を冷凍にする、その罪悪感に悩まされ続けた人生だった。その最後に、彼女は自分が正しかったことを確信しただろう」

「正しかった？」

「そうだ、あの赤ん坊は、世界を消す力を持っている。生かしておいてはならない存在なんだ」

「だからあなたも同じ事をしようというんですか？」

「そうだ、君は白居家で部下の犯した殺人に罪悪感を持つ必要はない。赤ん坊のDNAは、排除されねばならない。そうしなければ、どれほどの災厄がもたらされることか！」

内海は、言葉を失った。

（この老人は、俺の心を見抜いている。狂ってなどいない。心を揺るがせるなど言っている）

ユージン・ムーアは、正しいかもしれない、間違っているかもしれない。未来は、誰にもわからない。それでも、人は良い未来を掴もうと足掻く。

ただ、

（私たちには自衛する権利はあるが、だからといって他者を抑圧する権利をもっているわけではない）

どこで見た言葉だろう。その時は、正しいと思った。平時に

は、そういう理性が働いた。今、このときにも、自分はそう言いきれぬのだろうか？ 災厄が、人々に降り懸かる。どうすることが正しい選択なんだ。悲劇を最小限に食い止める方法を選ぶのは、傲慢な行いなのだろうか？

銃 撃

太郎は立ち上がった。

(明彦さんを連れてこなくては！)

集中治療室の前を離れると、夜中になっていることに気づいた。一階は真つ暗で、常夜灯だけが点いていた。外に出ると、秋の深まった空に、月が高く輝いている。

タズさんに言われて、昨日から学校を休んでいた。なぜ森を出てはいけぬのかわからなかった。タズさんだつてわかっているまいだろう。そうするように言われたのだ。

(一体誰に？ 誰に言われたのだろう)

そして、伽耶子が切り裂かれた。

(一体誰に？ 誰が犯人なのだろう)

緊急オペの間、ずっと廊下で待つていた。オペが終わって、集中治療室に入ると、一度だけ近くで姿を見せてもらった。でも、またすぐに廊下へ出された。ずっと、廊下で待つていた。さつき見た着白なまま目を瞑つた伽耶子の顔が思い浮かぶ。その唇はずっと、兄さん、兄さんと動いているような気がした。

太郎は、歩いた。足は、だんだん早くなって、走り始めた。一台の車が近付いて来た。運転しているのは休場だった。助手席の窓が開いた。覗くと

「送って行くよ、友康さんのところだろう」

と、言われた。

「ありがとうございます」

太郎は、助手席に乗り込んだ。

(伽耶子は、死んでしまうのだろうか？)

死は、太郎にとって何より恐ろしいワードだった。伽耶子が太郎を見て微笑む時、人の母に戻つて見つめてくれる一瞬、それを取り戻すことが、太郎の願いだ。

(その機会が、永遠に失われてしまう)

ぞくつと太郎は、身を震わせた。

休場は、助手席でじつと俯いたままの太郎に視線を走らせた。今朝の笹原の電話(あとは頼む)というフレーズには、何処まで含まれていたのか。笹原自身の逮捕は、事前にわかっていたのである。DNA鑑定の結果を知った敵が動き出した。としたら、白居幸枝はもう死んでいる、あとは、明彦と伽耶子である。太郎や亜子のことはどの程度知られているのだろうか？

大人である休場には、太郎のように自分の思いに浸つて、俯いている時間はない。が、本当は、彼とて、目の前で起こった殺人事件に、物凄い衝撃を受けている。



(彼岸の眠り)

話始めと同様に、伽耶子の話は突然終わった。戸惑ったままの休場と雪那を残して立ち去って行った。休場は、雪那に待っていてくれるようお願い置いて、伽耶子の後を追った。

桜の古木の前で、伽耶子は誰かと話していた。男は唐突に持っていた斧を振り上げ、振り下ろした。伽耶子を真っ二つに割るような勢いだった。物陰から老いた男が飛び出した。伽耶子を庇って前に立った。額に斧が入った。血飛沫が上がった。男が倒れても、血飛沫を浴びたまま、伽耶子は立っていた。怯えている風でも、驚いている風でもなく、ただ男のなす事を見ていた。

男は二度目の斧を振り上げ、伽耶子に振り下ろした。何処から現れたのか、豆腐屋が両手で男の手に縋りついた。押し留めようとしたのだろうが、斧の勢いは止められるものではなかった。振り下ろされた一撃は伽耶子の首筋に当たった。休場は、もつれ合う二人に体当たりした。ぶつかった弾みで男の手から血塗りの斧が落ちた。三人の男たちは、地に転がった。

三人の六つの目には、伽耶子がゆっくりと膝を折り、倒れていく様子が映った。伽耶子の首筋から流れ出す血が、地面に零れ、吸い込まれていく。三人の男たちの、泥に塗れ、血に塗れ、汗に唾に塗れた傍ら。喘ぎ、呻く、荒い息遣いの傍らで、静かに、静かに、伽耶子の血が白い首から流れ出て、地を抜け、地の下

の、黄泉の国へと降っていく。

頭上にキーンという音がした。休場が目を転じると、桜の木を背に亜子が立っていた。雉のような、野鳥のような、甲高い高音を發して。狂女の雄叫びのように、繰り返し繰り返し、亜子が奇声を上げていた。

そんな地獄絵に遭遇しても、休場は思考停止するわけにはいかなかった。海老沢に救護を依頼した。抵抗する力があるうとも思えなかったが、犯人の手を縛り上げた。警察に連絡した。その後は、もう果てしない大騒ぎだった。

どうしてこんなことになったのか？ 一体何が起きたのか？ この森は安全だと思っていた。伽耶子は自室にいても、雪那が倒れると、すぐに海老沢を呼び出した。この森は、伽耶子の視野の中。彼女に危害を加えるものを、察知できないはずが無いと思っていた。彼女を見て、感じた人々は皆、何かを取り戻す。彼らは決して、暴力を振るわない。人を傷つけない。

(だのに、なぜこんなことが…… 最悪だ！)

散々警察に説明を繰り返し、やっと解放されたのは、深夜だった。海老沢病院で、怪我人の容態を確認し、急いで明彦の所へ向かおうとした時、誰もいない通りを走る太郎を見かけた。考えている事は見当がついた。一人にしておくのも心配だったので、拾っていくことにした。

友康の家への路地にさしかかる。車の前方に人影の見えた気

がした。家の前に立つ。中は真つ暗だ。休場が玄關の戸に手をかけた。気配を感じた。力を入れてみる。戸はすつと開いた。(…………)

休場と太郎は、顔を見合わせた。

裏の方でガラスの割れる音がした。音へ走った。家の外壁づたいに砂利道を走る。中庭が開けた。古い木の雨戸が、ガラス戸とともに落ちていた。力いっぱい中から蹴破った感じだ。

その上に、人影が落ちてきた。どさつと、重なり合つて倒れ込んだ。一人がすつと立ち上がる。細身、長身のシルエット。

「明彦さん！」

太郎が声を上げた。

次の瞬間、その明彦にもう一つの影が覆い被さった。友康だ。

今、明彦の立った場所、何かが空気を貫いて、柿の木の幹に当たった。木肌が剥けて、火薬の臭いがした。

「えっ？ えっ！」

太郎は、このドラマのようなシチュエーションに、間拔けた声をあげることぐらいいしかなかった。

「火事だあ！ 火事だ！ 火事だ！ 火事だ！」

休場が声を張り上げる。

「なに？ なに？」

「なんでもいいから、大声をあげろ！」

休場にこずかれて、太郎も真似て騒いだ。

「火事です！ 火事です！」

隣家の電気がついて、窓が開いた。その隣り、前の家、あちこちに人の気配が動く。

「どこだ！」

「火なんか見えないぞ」

外に飛び出してくる人間もいる。

突き破られた雨戸から、襲撃者たちは出て来なかった。

「公衆の面前で、撃ち殺すわけにもいかないだろう」

彼らは、姿を見せることなく消えた。

「さて、今のうちに逃げるぞ！」

休場が歩き出す。

「なんで？」

「めんどくさい奴だなあ、自分で考えろ！」

太郎はまごついたまま立っている。

「馬鹿、あとで考えろ。とにかく、車まで走るんだ！」

休場が走り出した。友康は、明彦の手を太郎に繋がせた。そして太郎を走らせる。自分は二人の背後を庇うように走った。

太郎の握った明彦の手は、すべらかでひんやりしていた。手を引くというより、運動会で布リボンを持って走ったときを思い出した。ふわりとついてくる。

車に乗る。夜の街を疾走する。休場は、二度も地下駐車場を通って、尾けてくる車がないか警戒した。それから、一度車を止めて、携帯で連絡を取った。

「太郎君、悪いな。こういうことじゃあ、ちよつと病院には戻

れない。今夜は、頼子先生の所に泊めてもらうことになった」

「伽耶子が待ってるのに」

「明彦さんは、銃で撃たれるとこだったんだ。伽耶子さんを襲つたのも警察の人間らしい」

「そんな……」

「とにかく、明彦さんを連れてくるんだ。慎重に行動しないと」
(伽耶子さんの二の舞になる) という言葉は飲み込んだ。太郎もそれ以上何も言わなかった。これ以上言っても無駄なことはわかっていた。その通りなのだから。差し迫っている。

突然、銃、それも消音銃を撃つ人間に襲われた。銃を持つ人間たちに追われるなんて、想像したこともない。それなのに、警察にも届けられない。届けられない。なぜなら、伽耶子は今、警察官の起こした殺人事件に巻き込まれて、瀕死の状態にいる。(パラレルワールドに落とされた？ それとも、夢の中?)

本多頼子の住まいは、意外に近かった。本多病院長夫人であり、自らも医者である彼女に、子どもはいない。夫と二人暮らしである。大きなマンションだった。駐車場に車を止める。降りて、振り返ると、友康が車のドア外で、車内の明彦の足元に跪いていた。考えれば、家の中からガラス戸を突き破って飛び出て来たのである。怪我のないはずがない。友康は丹念に明彦の足を見ていた。白い素足から突き刺さったガラス片を抜く。そして、背を向け、明彦を負ぶおうとした。

「自分だって、怪我してるだろう！」

休場がそれを止めて、代ろうとしたが、友康は受け付けない。

「わかったよ。せめて、俺の靴を履けよ。点々と血の跡を残されたんじゃないからな」

休場は靴を脱いで、友康の方へ向けると、サッサと靴下で歩き出した。友康は靴を履いて、明彦を背負った。

明彦の方が背は高い。でも、圧倒的に質量が違うのだろう。

太郎が手を引いた時ですら、布リボンを想ったのだから。明彦を背負いながら、友康の足取りは、人一人を負ぶっているとは思えない軽さだった。

駐車場から、エントランスまで歩くうちに、頼子と出会った。雪那がいつしよだった。五階の部屋に着くと、ほっとした。マックスに緊張し続けていたことをみなが感じた。

頼子は、何度も明彦を盗み見ている。かつて、自分の中に住んでいた京子という少女の愛した若者である。実際に会ったのは一度きりだが、十二年の時を経て、そのときとんなら変わっていない気がする。不思議な立ち位置。風に吹き飛ばされそうなほどに軽く、原色の絵の具のように際立つ。不可思議な存在感。伽耶子と同じだ。

「主人は、今晚は病院泊まりよ。お腹すいていない？」

頼子が、太郎に尋ねた。太郎は首を振った。そういう感覚があることすら、思いつけない気がした。あまりに、日常過ぎる感覚だ。

友康は、リビングのソファに明彦を下ろすと、すぐ湯を張った洗面器をその前に置いた。白い足をつける。水面下に、ゆるゆると血が流れ出す。ゆるやかな膨らみを持った赤い線。湯気の下に揺れる。

明彦は、無表情で痛む様子を見せない。むしろ、氣遣う友康の手の動きに、傷の深さを感じる。

「代るわ。止血しないと」

今度の頼子の申し出を断る訳にはいかない。彼女は医者である。友康は、明彦の前を、頼子に明け渡した。

頼子の手が、明彦の足に触れたとき、ゆらりと明彦の体が揺れた。友康が横について、支える。

「貧血を起こしているのね。そのまま支えていて。すぐに手当でするから」

休場は、湯につかった明彦の足を、伽耶子の首筋のように白いと思つた。

夢幻泡影

海老沢は、廊下のベンチに腰を下ろしていた。泥のように疲れている。さっさと立ち上がって、自分の部屋に戻ればいい。

看護婦長がいたら、尻を叩かれそうだ。わかっているのに、いつまでも、ダラダラとベンチに座り続けていた。

今朝は、休場からの電話、怪我人の搬送に始まった。伽耶子

の傷を一目見るなり、二人の甥たちに任せられた方がよいと判断した。跡継ぎは、すでに自分より数段腕の良い医者になつてゐる。

(いや、それでも、だめかもしれない)

不吉な思いが頭を過ぎる。

が、それも束の間、すぐに続いて運び込まれた豆腐屋の擦過傷と打撲を手当てし、もう一人の男の死亡を確認した。匣子のこととは、心療内科医である本多頼子医師に連絡を取つて任せ、警察への対応に追われた。昨晚も殆んど寝ていない。その疲れもあつてか……

(いや、違ふ)

どこかに心の疚しさがある。それがぐずぐずと体を重くする。本当のところは何もわからない。わからないけれど。

犯人は高野洋二、高野美津子の弟だと聞いた。十二年前の罪に追いつかれたのだ。十二年前、高野美津子を安置する霊安室で一度だけ会つた。弟の面差しは、姉に似ていた。それ以外は、何も覚えていない。彼がその後、どう白居家と関わつたのか、何も知らない。明彦が看護婦を殺したと、伽耶子は気に病んでゐた。あの時、自分は何と言つただらう？ 何も覚えていない。十年以上前のことだ。あれからいろいろなことが起こつた。今もそれが続いている。一人の女性の死を軽んじたわけではない。軽んじたわけではないが、過去は遠ざかる。

怪我をした豆腐屋。彼が犯人の手に取り縋らなければ、伽耶子のか細い首など、切り落とされていただらう。初め、白居家

に豆腐が届けられるようになった時、タズさんは気味悪がつていた。代金も取らない豆腐を食べて大丈夫かしら、と言つていた。それが、すぐに本当に美味しい豆腐だと褒め、作り手である男のことまで、余程の善人でなければ、こんな豆腐は作れないと都合のいいことを言つて、信頼するようになっていった。

死んだ男のことは、弓子が心配していた。河川敷きに住むホームレスを伽耶子に会わせたら、森に住み着くようになってしまったが、大丈夫だろうか、と。そのホームレスが、我身を伽耶子を守つた。一撃目を受けたこともそうだが、彼の血糊が二度目の刃を滑らせたのだろう。

犯人の高野洋二、被害者の伽耶子、助けに入った休場、ホームレスの男、豆腐屋。皆、なんと不思議な縁に繋がれているところか。

今のところ、警察でも死んだ男の身元は判明しないようだった。海老沢も弓子から、ホームレスの男がなぜ河川敷きに住みつけたのか、訳の解からないエピソードは聞いたが、具体的に身元に繋がる情報は、何も聞いていない。

ふと、顔を上げた海老沢の目に、川沿いの土手の風景が見えた。照明を落とした薄暗い病院の廊下の少し先に、はつきりと空が、土が、草が見えた。それが、早朝の風景であることもはつきりとわかつた。

一人の気の弱そうな若者が、その土手にやつて来た。

土手の上に自転車を止めて、ふらふらと歩いてきた。草に覆われた斜面に腰を下ろした。川面を見つめている。だんだん、日が高くなる。雨が降って来た。やがて、雨は止んだ。日が暮れる。冷えてきた。夜になった。もう、長い時間が過ぎていく。景色を楽しみむにしても、人を待つにしても、一人で何かを考えるにしても、決断を思い悩むにしても、あまりに長い時間だ。

海老沢には、これが、ホームレスの男の見た風景だとわかる。力になりたいと思いついて始めている心の動きまで、はつきりとわかった。

どうしてその若者に、心が近づいたのか…… 誰にも動かなかった男の心。家族すら寄り添えなかった心なのに。

「どうして欲しい？」

男のほうから声をかけた。若者は男を見た。けれど、また視線を川面に戻す。

「こんなホームレスじゃあ、しょうがないと思ってるのか？」

ふだん、人に話しかけるなど、したこともない男である。

若者は、頑なに押し黙っていた。

「死にたいなんて思ってるのか？」

若者は、口を利かない。

（そんなもんだよな）

男にはわかっていった。いくら近づこうと努力しても、だめなものだめなのだ。閉ざされた人の心は開かない。今まで、男を助けようと手を伸ばしてくれた人たちもいた。けれど、石に

なってしまった彼には誰も届かなかった。

「俺は金を持つてるよ。見かけがこんなだからって、みくびつてもらっちゃあ困る」

若者が顔を上げた。男の言葉に反応した。金という単語が若者に響いた。

「金が必要なのか？」

男が問う。暗い声が答える。

「一万や二万の金じゃない」

若者は、自分が返事をしてしまったことを取り消そうとするように、そっぽを向いた。

男は上着を脱ぎ、シャツを脱ぎ、ズボンを脱いだ。腹巻も脱ぐと、その下にさらしを巻いていた。馴れた手つきで解いていく。そして、現れた札束を若者の前に差し出した。

「数えてみる」

若者は躊躇っていた。

「数えてみる」

男がもう一度言うのと、そろそろと手に取って数え始めた。

「こんなに……」

呆然とした顔で男を見つめる。

怖いものに触れてしまったというように、びくつと体が震えた。金を男に押し返す。

「金が必要なんだろう」

若者はめいっばい首を振った。

「いらぬい！」

悪魔に誘惑されまいとする悲痛な声だった。

「必要なんだろう！」

「やめてくれ！」

若者は、叫んだ。逃げるように川へ走る。遮二無二突き進んで行く。男が追いかける。追いつく。揉み合った。揉み合う内に、札束が宙を舞った。金がばら撒かれた。這い蹲つて、かき集めたのは若者の方だった。一枚、一枚、手に握り締め、掻き集めた。

男の足元に落ちた最後の一枚を掴む。顔を上げた若者の目には、凶悪な閃きがあった。金を自分のポケットに思い切り押し込む。二、三步後ずさると、目を合わせたまま、石を拾いあげた。武器になりそうな大きさの石である。

男には成す術がない。なぜ、この若者なのかもわからない。人を拒絶してきた自分が、初めて人に近づこうとした。自分と同じように、ここに座り込んでしまった若者。彼を立ち上らせようとした。そして、拒絶にあった。どうにかしようと、愚かしくも長い長い間かかって貯めた金を持ち出した。その結果がこれである。なんと馬鹿馬鹿しい人生であることか。

けれど、若者は石を振り上げなかった。かわりに、ぬかるんだ地面に土座した。

「この金を貸して下さい。必ず返しに来ます。必ず返しに来ます。ここへ返しに来ます。絶対に返しに来ます。絶対に！」

「いいよ」

男は答えた。けれど、その返事が若者の耳に届いたものかどうかもわからない。若者は身を翻すと土手を駆け上がって行った。自転車走り去って行く。

死んだホームレスが、二度とこの若者に会うことのなかったことを、海老沢は知っている。ただ、この記憶は熱い塊りとなって、彼の心にあり続けた。彼は金を待つていたのではない。彼がこの世に生まれて初めて、なんの欲得もなく自ら結んだ絆。それに繋がる人を待つていた。

風景は消えた。暗い廊下に戻る。海老沢は、自分の目を疑わなかった。素直に、死んだホームレスの過去が自分に降つて来た事を感じていた。

高野洋一は、夜空を見つめていた。昼間は、外に出してもらえなかった。だから、夜、寝床を抜け出した。彼は、昼間の騒動が、弟、洋二の事件によることを知らない。いや、彼の世界に事件は起こらない。家族もいない。空と木と風があるだけ。鳥がいるように、人がいる。

その夜の星座は、いつもの星座と違っていた。見たこともないほどの星の数。見たこともない配置。洋一には、その星を見ているのが、自分ではないことがわかっていた。

自分の夜空の星の配置は知っている。教えてくれる人がいた。いつも自分の傍らに。それが母であることを洋一は認識してい

ない。母という存在を理解していない。だから、精薄児で生まれ、そのまま大人になってしまった子に、寄り添い続ける母を可哀想に思ったことはない。子の行く末を案じながら老いる彼女を、世間が哀れに思っていることも知らない。

今は、亡き母。洋一の傍らで、彼女は何も取り繕わなかった。

洋一は、母の話す声が好きだった。母も洋一と星をながめるのが好きだと言った。

「織姫と彦星は、年に一度しか会えんで、可哀想じゃ言うけど、星は人間よりずうっと長生きなんよ。年に一度なんて、人間にしたら毎日会ってるようなものかしれんよ」

洋一にとつて、母は明るくて楽しい人だった。繰り返し、繰り返される、二人の時間の中で、少しずつ星座を覚えて。

でも、今夜の星座はそれとは違う。砂漠で寝転びながら、悲しい気持ちで見た星座だった。洋一が味わった事もない胸の潰れる思い。それに耐え、カメラを握り締めて、じっと見つめた星座だった。

(これは、誰の星座？ 誰の目？)

洋一は、不思議な夜を過ごした。

頼子の手が湯を揺らし、ちゃぷりと鳴る。休場は、湯気の向こうに赤ん坊の姿を見た。泣き声を聞いた。

(お前もどうせ私を残して行ってしまおうのだ)

老婆が、赤ん坊と一緒に泣いていた。

お乳を飲ませ、おしめを替えて、子守唄を歌う。

赤ん坊が大きくなるのは早い。いつのまにか、生垣を越えて外に出て行ってしまふことがあった。老婆は、怯えた。この子も出て行って、二度と帰って来ない。

老婆は、赤ん坊の腰を寝巻きの紐で柱に結わいた。

彼女は、年をとり、言葉も忘れ、生活することも忘れていった。腰は曲がり、手は不自由になり、足は痛んだ。自分が何者かも忘れた。

それでも、年に数回届けられる米で、毎日ご飯を炊き、握り飯を作った。赤ん坊は、赤ん坊ではなくなったけれど、老婆のそばにいた。大きくなっても、柱に結わいた紐をほどこうとはしなかった。老婆を非難することもなかった。

老婆は、男の子の目に、鬚りの焔を見ていた。それは、老婆を置いて去った娘の後悔する目に見えた。

(ごめんね)

そうやさしく囁いているようだった。

(これは何なんだ？)

休場は、映画の回想シーンのような幻影が、友康の死んだ祖母のものであることに気付いた。

(それにしても)

休場は、周りを見回した。

雪那も太郎も、まるで降り始めた雪を感じようとする人のよ

うに、両手を広げて空を見上げている。何が見えているのだろう。頼子までも、明彦を手当てする手が動いていない。

手が明彦の足に触れる、頼子は、一瞬で、駅ビルの見慣れた店の前にいた。自分の過去の記憶ではない、なのに、自分の過去の記憶。

(これは、なに?)

京子さん……。頼子は、京子だった。

ペットシヨップの子犬が可愛い、ベルギーワツフルの臭いが甘い、あんなコートを着てみたい、店々をくるくると覗きながら歩いてきた。どうして自分が今ここにいるのか、わかってもいなかった。でも、楽しかった。生きていて楽しかった。

そして、改札口近くに着いたとき、明彦がいた。すぐに、わかった。雑踏が遠のいて明彦だけが見えた。たくさん、の時間を越えたさざめきが、この人である事を教えてくれた。(私はこの人を、始まりから追ってきた)

不思議なことに、彼も、京子を探していたと言った。一昨日、京子を見たのだと言う。

京子は知りたかった。今の彼が何者であるのか? どういう器が彼を捉えたのか? 何もかもを知りたかった。

明彦の髪に触れる。京子の指先からむ細かい髪は、脆弱なたんぱく質でできていて、それは今の明彦そのままだった。彼は自分の力に怯えている。自分の存在を怖れている。

京子は、白いライオンの話をした。

「白いライオンは、マントヒヒの子を助けようとするんだけど、その子はライオンを恐がって手を放してしまう。流れて行く子を見つめながら、その白いライオンはたてがみを振り乱してウオーツと吼えるの。白い月の下、草原をどこまでもその悲しい声がかだましていく」

京子は、明彦の怖れを打ち消したかった。流れて行くマントヒヒの子を悲しむ必要はない。

京子が、自分の器を失う瞬間、彼女は明彦に抱きしめられていた。死の一瞬、全てが彼女に戻った。

宇宙の始まり。不均衡がこの時間軸を生み出した。多すぎる存在の粒子。元に戻すことが、原子を、素粒子を持たない、もう一つの世界との均衡。取り戻す為に、ここに送られてきた。だのに、なぜ人という器に捕らわれ、立ち止まっているのか。

京子が、全てを取り戻しても、この少女の器で、たんぱく質で、この視野で、この言語で、交わせるコミュニケーションは限られている。明彦は理解しただろうか。もともと彼は弱い半分なのだ。自分の真実を受け止める事ができない半身。なら、待てばいい。やがて、時が明彦という器を砕くまで。

(確かに、届けたのだから)

京子の思念は、青いイメージとなって明彦を包み消えていった。

「頼子先生！」

休場に声をかけられて、我に返った。それでも、目の前には、あの時と変わらない明彦がいる。頼子の手は、震えた。

あとからあとから、降ってくる。

(何が?)

わからない。

それは、なんの脈絡もない。

そこには、なんの法則もない。

ただ、降ってくる。

器を失った何か。

人というたんばく質につまっていた何か。

(なぜ、今、こんなことが起きているのか?)

雪那が立ち上がった。人とも見えない輪郭、幻のような立ち姿。今の光景には似合っている、どんな絵画よりも、どんなオブジェよりも。この現と夢幻の垣根が崩れた世界に。

雪那の声が流れる。静かに、揺蕩うように。夜の上を滑り、時の泡立ちに揺らいで。

「伽耶子さんが死んだわ」

なんてそのままな言葉だろう。死は、どう繕っても、死なの

である。人々の涙に飾られようとも、誰にも知られなくとも。

全員に共通の理解が訪れた。

(弾けたのは、伽耶子という器。彼女を取り巻いていた思いが、彼女の中に詰まっていた記憶が、人の上に降りかかる。さらさらと、しんしんと、ふつふつと、どろどろと。やがて、滲んで消えるのだらう。留まることはできない。そこに、時があるからには)

振り仰ぐ人、手の平に受け止める人、肌を感じる人、気付かぬ人。

雪那が、ようやくと、体の向きを変えて、窓の外を振り向いた。大気の上に満月がある。

(そこにいるのは、誰?)

誰かが、大気の中に溶けている。

雪那は、一歩進んだ。明彦に近付こうとする。月の光を背で遮りながら。外気から彼を守るように。二歩目がよろいだ。とつさに、友康が受け止める。明彦から友康の手が離れた。

ばしやりと尾びれが叩いたような水音。明彦が濡れた足で窓に寄る。とらえどころのないしなやかな身のこなし。その姿はすでに開け放たれた窓の向こう。なんのためらいも、とどこおりのない動作が手すりを飛び越える。明彦の体が満月に向かつて、ダイブする。

大地にその身を与えんがため?

大気に溶けんがため?

友康があとを追う。手すりを蹴つて宙を追う。空にはためく、手首を掴む。引き寄せる。

重力のままに投げ出された二つの体。ポテンシャルエナジーを失いながら、落ちて行く。友康は、墜ちていく明彦の頭を抱いた。しっかりと胸に抱く。丸く抱き込む。

(自分も昔、こうして抱きしめられていた)

友康の茫洋たる記憶の海の大半は、抱きしめられたぬくもりだった。祖母に抱きしめられていた。孫を愛おしむ鄙びた手。安らぎに満ちた時。

だからこそ、忘れることが出来なかった。あの時突き飛ばした自分の同胞。奈落に吸い込まれていった、この世に生を受けることのなかった兄弟。

生まれ出たこの世は美しかった。毎日毎日、老婆に抱かれ、子守唄を聞き、小さな庭の四季の移ろいを眺めた。日が昇り、沈む、空の様を見た。暮らしにさんざめく音を聞いた。

ぬくもりも歌声も、すべてが愛されている気に満ちあふれていた。

(自分だけが今、ここにいます)

満ちれば満ちるほどに、透明な悲しみがあつた。翳りの焔にちろちろ焼かれた。

それが今、空を裂きながら落下するこの瞬間に追いついた。胸に抱きしめた体は、闇に消えていった兄弟のもの。友康のベクトルは、まあるい光の輪に閉じていく。

鈍い音が、休場たちの耳に響いた。

全員がベランダの手すりに身を乗り出して下を見た。折れ曲がった体が見えた。明らかな死。友康の体は、不自然に折れ曲がっている。明彦を包み込み、首から地面にたたきつけられた。即死であろう。そんな衝撃にも拘らず、明彦の体はしっかりと友康の腕の中にあつた。

そして……

友康の腕を外して、明彦がすつと立ち上がった。まったく、何の力も受けなかつたかのように。地球の重力など、気にもかけないというように。

太郎は、視線を上げた。真つ直ぐに空を見る。五階の、目の前の空間に人を捜した。伽耶子を捜さずにはいられない。雪那が窓の外を見たとき、確かに伽耶子がそこにいた。明彦を呼んでいた。姿が見えたわけではない。気配を感じたわけではない。伽耶子の存在は、器を解き放たれて、存在だけを確認させる。彼女は、明彦を、自分の半身を取り戻しに来た。

(でも、もういない)

友康が、明彦を留めたからだ。明彦は、生きている。伽耶子の元ではない。太郎たちの側に留まっている。

友康が生まれる前に犯したと言った罪、兄弟殺しの罪は、明彦の手を握った瞬間に贖われた。それは、きつと友康がずつと



その罪を心に刻んで生きてきたからだ。時の向こうの罪が贖われることは稀だ。太郎は泣いた。

「明彦さんを行かせないで！」

雪那の声。四人の視線が、明彦を追う。

高いマンションと私立高校の校庭が向かい合っている。その間を滑走路のように、広い道路が通る。真夜中の満月に向かうならかな勾配。一台の車も通らない。一人の人間もない、無音の道。葉を落とした銀杏の木が、槍を捧げた騎士のように居並ぶ。背の高い街灯が王の道を照らす。白く浮き立つ道を、彼が行く。

「明彦さん？」

太郎の咳きが聞こえたかのように、彼は振り返った。初めて視線が合った。本当の明彦に、今、初めて出会った。

産みの母の弟。育ての母の兄。

黒髪のかかるガラスの目。夢遊病者のような足取り。バランスを崩しながら、なのに軽やかな、月の光を遊ぶような、弾んだような、沈むような。

月影が彼を擁く。細く長い影を地に這わせる。

「行かせないで！」

けれど、去って行く。

白い道には、濡れた足跡と赤い血。

誰も追いつけない。

最終話『選択』に続く